板付周辺遺跡調査報告書

(9)

—1982年度調査概要—

福岡市埋蔵文化財調査報告書第98集

1983

福岡市教育委員会

巻首図版　B－12b 調査区出土木簡

序

古来、北部九州は稲作を中心とした農耕文化黎明の地であった事が、わが国一般の認識であります。その中でも、わが郷土福岡市の国指定の史跡「板付遺跡」は、内容、規模ともに農耕文化発祥の地である事を歴然と証明しています。

「板付遺跡」は大正６年（1917）九州大学医学部の故中山平次郎博士によって世に紹介されてこの方、在野、学会を問わない数次の調査が繰り返され、その成果はわが国の農耕文化史研究の基礎的資料として、広く活用されており、福岡市の本懐とするところであります。

福岡市は先学の熱意に答え、この貴重な文化遺産を後世に伝えるべく昭和51年（1976）「板付遺跡」に国の史跡指定を受けました。しかし、指定地外にも「板付遺跡」関連の文化財が埋蔵されていることを知り、本遺跡周辺にも開発に先だって調査の手をさしのべる事にしています。

今年度の報告書は弥生時代の集落と甕棺墓地、古代の寺跡そして中世の集落跡等の内容を記しています。関係各方面で御活用いただければと願うものです。

末尾ながら、調査時における関係各位の御助言、御協力に対し、心より感謝申し上げる次第であります。

昭和58年３月31日

福岡市教育委員会

教育長　西津茂美

例　言

1　本書は、福岡市教育委員会が国庫補助を受けて、昭和57年度に実施した福岡市博多区板付遺跡、ならびに周辺遺跡の調査概要である。

2　発掘調査は、教育委員会文化課が実施した。調査組織は以下のとおりである。

総括　文化課長　生田征生
埋蔵文化財第２係長　折尾 学
調査担当　柳沢一男
杉山富雄
田中寿夫
事務担当　古藤国生

3　Ｂ－12ｂ調査区出土の墨書土器・木簡については、解説原稿を九州歴史資料館・倉住靖彦氏に写真撮影を同・石丸洋氏にお願いした。ご多忙中にもかかわらずおひきうけいただいた両氏に深甚なる謝意を表したい。

4　本書の執筆分担は次のとおりである。

Ⅰ・Ⅱ（墨書土器、木簡を除く）
……柳沢
Ⅱ（墨書土器・木簡）
……倉住靖彦（九州歴史資料館）
Ⅲ……杉山
Ⅳ……田中

5　本書に掲載した実測図の作成、写真撮影は各担当者が行った。Fig. 24の木簡写真は九州歴史資料館、石丸洋氏による。

6　掲載した土器実測図のうち、断面白ヌキは弥生土器・土師器、黒ベタは須恵器、アミは陶磁器をしめす。

7　本書に使用する方位は磁針である。真北との偏差は、西偏6°40″である。

8　本書の編集は、各執筆担当者協議のうえ柳沢が行った。

本文目次

Ⅰ　はじめに……1

Ⅱ　Ｂ－12ｂ・ｃ調査区……3

Ⅲ　Ｆ－７ｅ調査区……27

Ⅳ　諸岡遺跡Ａ－２区……35

挿図目次

Fig. 1　板付周辺遺跡地区割図……折り込み

2　高畑遺跡東縁部調査区位置図……折り込み

3　Ｂ－12ｂ調査区全景（南から）……3

4　高畑遺跡東縁部遺構配置図……4

5　層位模式図……5

6　Ｂ－12ｂ調査区遺構配置図……6

7　ＳＤ01埋没状況（南から）……6

8　ＳＫ02、ＳＥ04（北から）……7

9　ＳＤ03（南から）……7

10　ＳＥ06・07（北から）……7

11　ＳＫ09（北から）……8

12　ＳＸ11（南東から）……8

13　ＳＤ10（北から）……8

14　Ｂ－11ｃ調査区（北から）……8

15　軒瓦実測図……9

16　丸・平瓦、熨斗瓦、塼実測図……10

17　瓦、塼……11

18　ＳＤ01－Ａ出土土器実測図……12

19　ＳＤ01－Ｂ出土土器実測図……13

20　ＳＤ01－Ｃ出土土器実測図……15

21　焼塩土器、輸入陶磁器、硯実測図……17

22　墨書土器実測図……19

Fig. 23　墨書土器…… 20
24　木簡 …… 折り込み
25　木製品実測図Ⅰ …… 22
26　木製品実測図Ⅱ …… 23
27　木製品 …… 24
28　高畑廃寺位置想定図 …… 26
29　F－7e調査区全景 …… 27
30　F－7e調査区全体図 …… 28
31　SK54 …… 29
32　SE42・SE53 …… 29
33　SE42土層図 …… 29
34　SE53実測図 …… 30
35　土器・陶磁器実測図Ⅰ …… 30
36　墨書土器 …… 31
37　土器・陶磁器実測図Ⅱ …… 32
38　土器・陶磁器実測図Ⅲ …… 34
39　石製品・金属製品実測図 …… 34
40　諸岡遺跡A－2区位置図 …… 35
41　諸岡遺跡A－2区甕棺配置図 …… 36
42　SK01・12実測図 …… 37
43　諸岡遺跡A－2区全景（北から）…… 38
44　SK01 …… 38
45　SK12 …… 38

I　はじめに

既往の調査

福岡市教育委員会は、板付遺跡の一部史跡指定に伴い、板付遺跡の歴史的推移と周辺遺跡との関連を確認するため，1973年度以降発掘調査を継続している。

その調査の対象は、板付遺跡を中心に、南西0.8kmの諸岡遺跡、南0.5kmの高畑遺跡である。81年度までの実施状況は、板付遺跡で29次（調査面積13000m²）、諸岡遺跡は14次（6500m²）、高畑遺跡は７次（1300m²）である。

板付遺跡は、東西約120m、南北500mあまりの中位段丘上に集落、墓地がひろがり、その東西沖積地に水田が展開する。段丘には二ヵ所の鞍部があり、北・中央・南の各台地に区分される。著名な夜臼、板付Ⅰ式期の環溝は中央台地に位置する。これまでの調査は、周辺地区の宅地造成に伴う小規模なものが多く、また調査区が全体をカバーしていないため、未だ板付遺跡の全体像を展望するに至っていない。とくに、環溝内は未調査に等しい状況にあり、南台地でも中央部分はほとんど手つかずのままで、不分明なところが多い。まず北台地では、前期末～中期後半の墓地[1]、前期末～中期初頭の貯蔵穴群が検出された。中央台地では、銅釧、銅鉾各３本を副葬した甕棺墓として中山平次郎氏によって紹介された田端遺跡[2]が、環溝の東南に接して位置したこと、さらに、環溝の北西部にも中期中葉～後葉の墓地が形成されたことが知られた[3]。貯蔵穴群は、環溝の南にひろく分布し[4]、南台地の縁辺部[5]にも検出された。南台地では、前期末に遡るとみられる木棺墓[6]も検出されており、北台地に似た状況の可能性がある。水田遺構は、中央台地の東西に検出されている。とくに西側沖積地Ｇ－７ａ・ｂ調査区[7]の水田は、最下層に夜臼Ⅰ式期、その上に板付Ⅰ式の水田が間層をはさんで重複しており、それに伴う水路、堰、取排水溝、水田面を区画する畦畔が明らかとなった。東側沖積地の水田[8]は、夜臼Ⅰ式期の旧河川埋没後に開墾され（板付Ⅰ式期）たもので、水路、堰、取排水溝が検出されている。

諸岡遺跡では、板付遺跡とほぼ同時的に夜臼Ⅰ式期の集落[9]が形成されるが、板付Ⅱ式期以降に継続していない。板付Ⅱ式期の段階では、多量の無文土器を伴出した土坑群[10]があるが、はたして、集落に付属するものであるのか否か、明らかではない。

高畑遺跡は、台地上がすでに削平されているため縁辺部の調査が主となっているが、次節で述べるように、今年度の調査によって台地上には８世紀中葉創建寺院の存在したことが明らかになった。

また、遺構は未検出であるが多量の夜臼、板付Ⅰ式以降の弥生土器が出土し、高畑遺跡もまた板付遺跡とほぼ同時に形成され、弥生時代を通して継続した集落であることが推測される。

このように、近接して存在する板付、高畑、諸岡の各遺跡では、夜臼Ⅰ式期の段階に集落が形成されたことが明らかになった。集落形成の契機が夜臼Ⅰ式期における稲作の開始とすれば、板付遺跡のみならず、高畑、諸岡遺跡の周囲でも稲作を行ったと推測される。

今年度の調査

さて、今年度調査を実施した地区は次表のとおりである。

1982年度 調査地区一覧

調 査 区	調査区所在地	調査対象面積	調査面積	調 査 期 間
B－12b	博多区板付6丁目10－6	1354 m²	330 m²	82.4.16～6.2
B－12c	〃 板付6丁目	94 m²	94 m²	82.6.5～7.23
F－7e	〃 板付5丁目3－19	148 m²	116 m²	82.6.4～6.18
諸岡A－2	〃 諸岡1丁目	232m²	190 m²	82.5.19～5.29
諸岡館址B	〃 諸岡1丁目17－31他	1306 m²	1150 m²	82.7.20～10.26

B－12b・c調査区　高畑遺跡の東縁辺に位置する。台地縁辺を南北に流れる大溝、井戸、土坑などが検出された。大溝SD01は、幅10m、深さ2mにたっする。8世紀前半に掘削され、早くも9世紀後半には埋没してその機能を失っている。埋土中からは、大量の瓦、塼、輸入陶磁器、墨書土器、木簡、木製品、須恵器、土師器が出土した。高畑遺跡の形成された台地は、昭和14～15年頃、工場建設によって削平されたが、その際多くの礎石と思われる大石が動かされたと伝えられ、今回の調査によって得られた資料からみて、8世紀中葉創建にかかる寺院が存在したことは確実であり、新たに、高畑(たかばたけ)廃寺と称する。

F－7e調査区　板付遺跡中央台地の環溝の南に位置する。台地は削平をうけ、遺構検出面は鳥栖ローム層である。検出遺構は、中世の井戸、掘立柱建物の柱穴がある。調査範囲が狭いため建物の平面プランを確認しえたものはない。

諸岡A－2区　1974年に調査されたA区の南斜面にあたり、14基の甕棺が検出された。中期前葉～中葉。

諸岡館址B区　諸岡遺跡の北端に位置する。1981年に調査したA区の北側。幅5～6m、現高1mの土塁をめぐらす15～16世紀の居館である。土取りによってすでに東半分を失っているが、掘立柱建物20棟以上、地下式土坑5基、土坑などが検出された。さらに館址下から、板付II式期の貯蔵穴5基、5世紀後半代の竪穴系横口式石室を埋葬施設とする古墳2基が検出された。

（注）

1) 『板付―市営住宅建設にともなう発掘調査報告書―1971～74』（福岡市埋文報第35集）1976
2) 中山平次郎「銅鉾・銅剣の新資料」（考古学雑誌7巻7号）1917
3) 『板付周辺遺跡調査報告書（3）』（福岡市埋文報第36集）1976
4) 『板付周辺遺跡調査報告集（5）』（福岡市埋文報第49集）1979
5) 『板付周辺遺跡調査報告書（2）』（福岡市埋文報第31集）1975
6) 5) 文献
7) 4) 文献
8) 『板付周辺遺跡調査報告書（8）』（福岡市埋文報第83集）1982
9) 『板付周辺遺跡調査報告書（6）』（福岡市埋文報第57集）1980
10) 『板付周辺遺跡調査報告書（2）』（福岡市埋文報第31集）1975

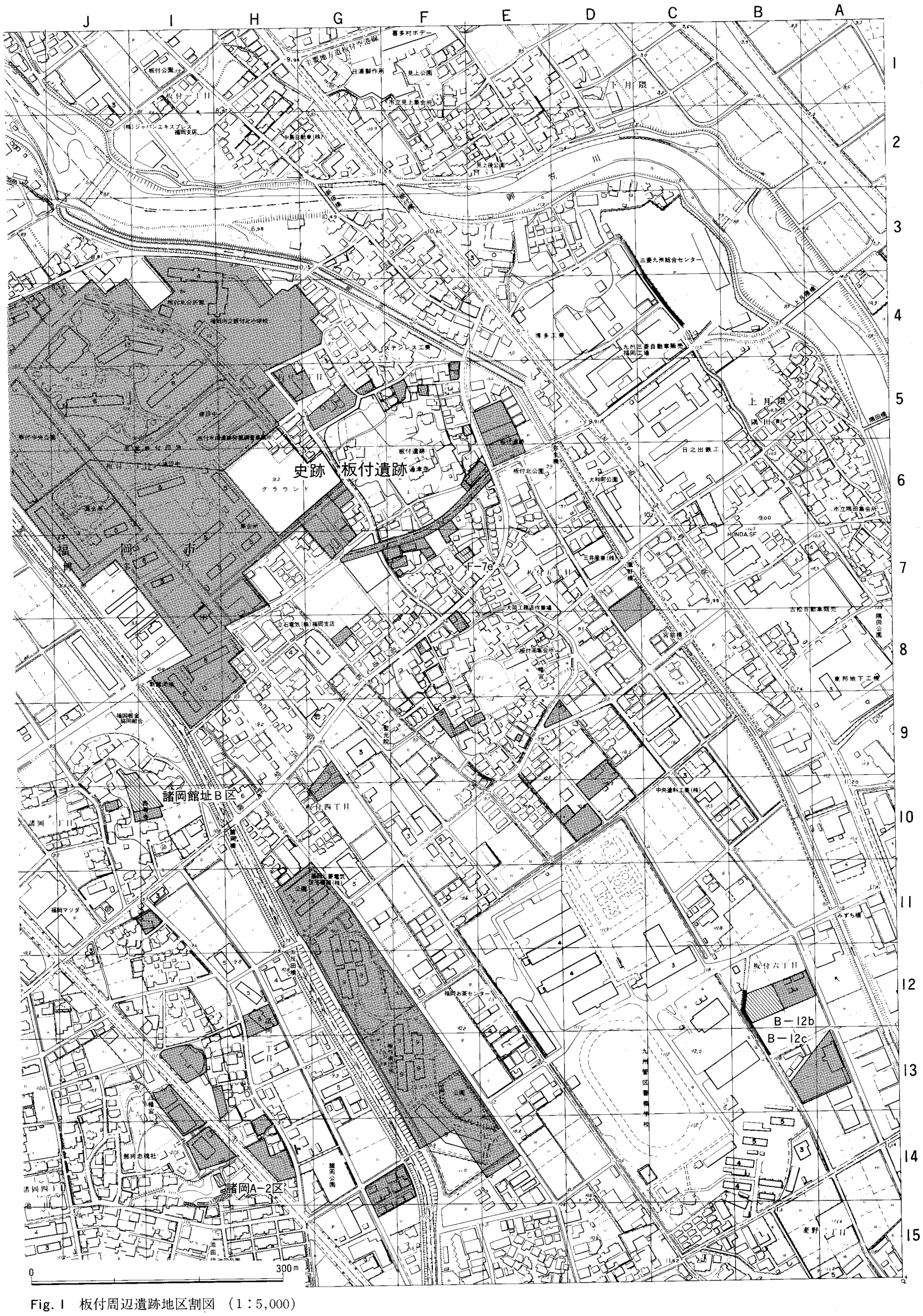

Fig. 1　板付周辺遺跡地区割図　(1：5,000)

▨は既調査地区

▧は本年度調査地区

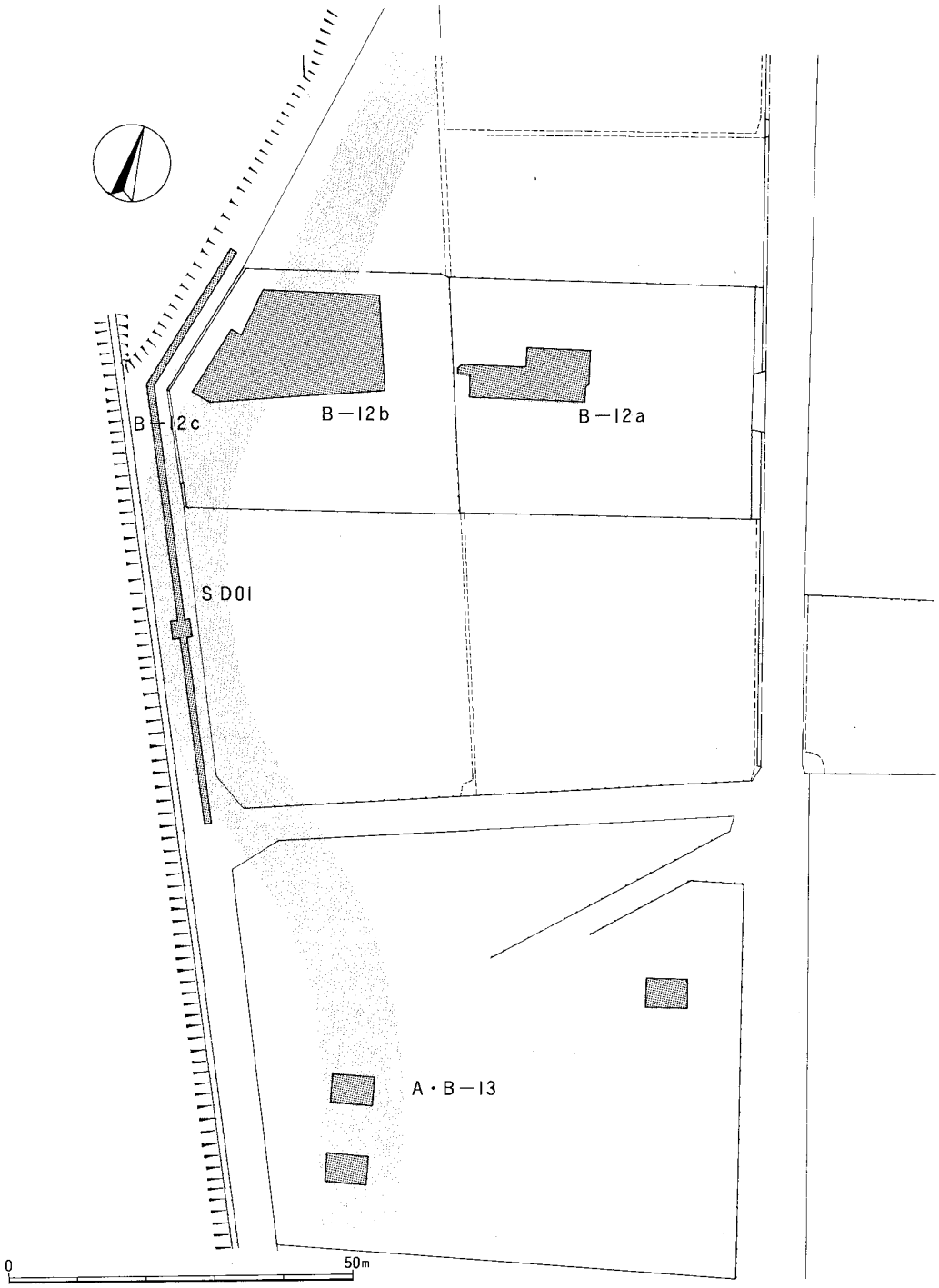

Fig. 2　高畑遺跡東縁部調査区位置図（1：1000）

II　B－12b・c調査区

本調査区は、板付遺跡から0.5㎞南の高畑（たかばたけ）遺跡東縁辺に位置する。高畑遺跡は、かつて警察学校校庭遺跡とされてきたが、詳細分布調査の結果、如上のように名称変更した。

高畑遺跡の立地する台地は、現在標高12mまで削平されているが、以前は18mあまりの高まりがみられた中位段丘である。南北700m、東西約200m、板付遺跡とのあいだを旧河川が横断し、台地は連続しない。本遺跡の調査は、縁辺部を主にこれまで7次行われている。

1次	D－9・10	1973年調査	旧河川氾濫原：弥生土器
2次	A・B－13	1973年　〃	遺構なし　　：弥生土器、瓦、須恵器、土師器
3次	B－12a	1975年　〃	土坑・杭列　：須恵器、土師器、弥生土器
4次	D－10a	1979年　〃	土坑・溝(8～9c)・溝(5c)：瓦、須恵器、土師器、木器
5次		1980年　〃	遺構なし
6次		1981年　〃	〃
7次	D－10b	1981年　〃	溝(5c・8～9c)：須恵器、土師器、木器

1・4・7次調査は台地北縁部、5・6次は台地西縁部、2・3次と本調査区（8・9次）が東縁部にあたる。

台地西縁部　両調査区とも八女粘土層まで削平されており、検出遺構はない。

台地北縁部　D－9・10調査区は旧河川氾濫原。D－10a・b調査区では、台地東縁に沿った5世紀代の溝、8～9世紀の溝、土坑が検出された。とくに土坑SK01には土師・須恵器と

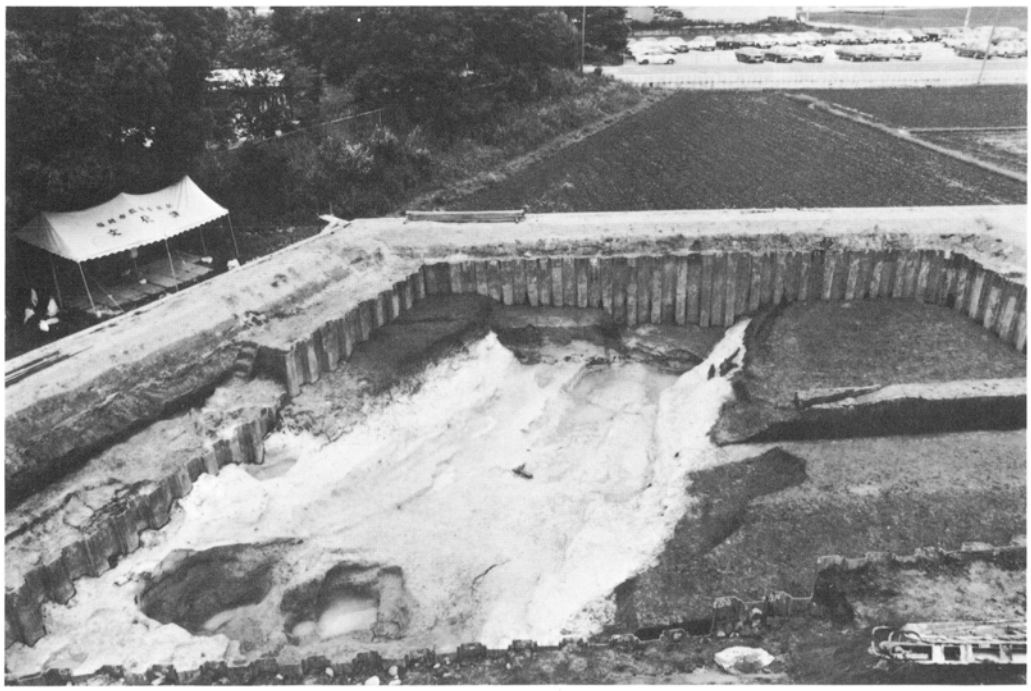

Fig. 3　B－12b調査区全景（南から）

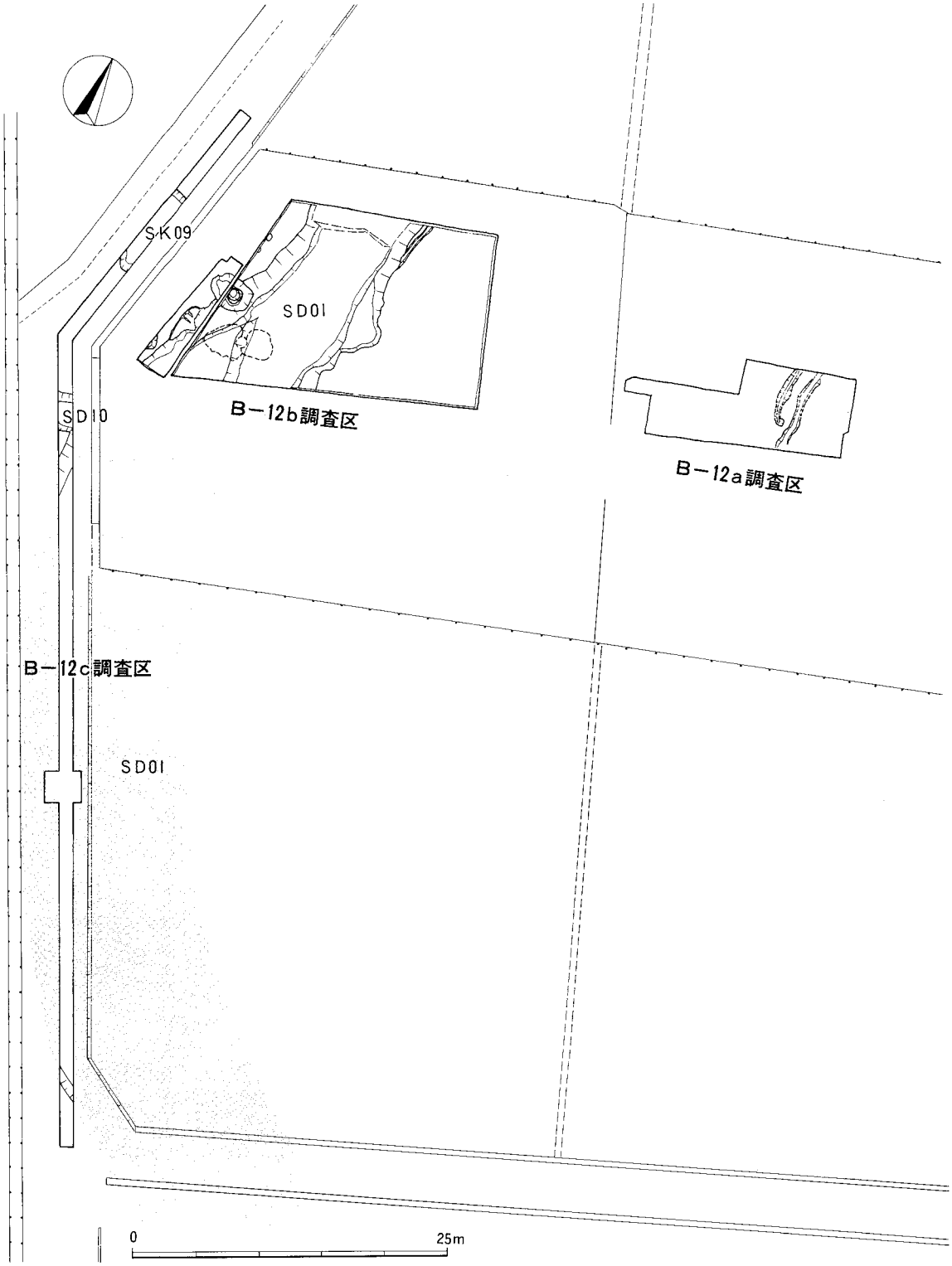

Fig. 4　高畑遺跡(廃寺) 東縁部遺構配置図 (1：500)

ともに、瓦・塼が含まれており、台地上に奈良時代創建寺院があるのではないかと予想された。

台地東縁部　Ｂ－12ａ調査区では不整形の土坑、杭列が検出され、少量の古墳、奈良時代土器片が出土。Ａ・Ｂ－13調査区は３本のトレンチを設定したが、台地に接するトレンチは湧水が著しく下底面まで調査していない。弥生土器、土師器、須恵器片が出土。

前述したように、台地上には礎石と想定される大石がかつて相当数存在していた事実と、周辺調査によるこうした瓦・塼の出土は、奈良時代創建寺院の存在が充分に予想されるところであった。

Ｂ－12ｂ調査区は、試掘調査によって台地端に沿って大溝があること、その東側沖積地に水田址が予想されたため、湧水と安全対策を勘案して、調査区全体にシートパイルを打った。調査の結果は、設定した調査区の西半は南から北に流れる溝ＳＤ01がしめた。ＳＤ01は幅10～14ｍ、深さ２ｍにたっし、埋土を上層からＡ・Ｂ・Ｃに三分した。後述するように、とくにＢからは木簡や大量の墨書土器、瓦、塼が出土し、寺域を画する溝かと推測された。

Ｂ－12ｃ調査区は、下水道埋設工事に伴って行ったため、幅１ｍ、長さ80ｍのトレンチである。調査区の北半はＢ－12ｂの西側台地上、南半はＳＤ01を斜断している。台地上から大形土坑ＳＫ09　ＳＤ01に直交する溝ＳＤ10が検出された。調査区南端では、ＳＤ01の西岸が検出されたため、この大溝は台地縁に沿ってゆるく蛇行することが明らかになった。

土層の関係

調査区が台地端部にあたるため、東半部は沖積堆積の層序をしめす。模式図はＢ－12ｂ調査区の中央を東西に横断し、ＳＤ01と他の遺構との関係をあらわす。

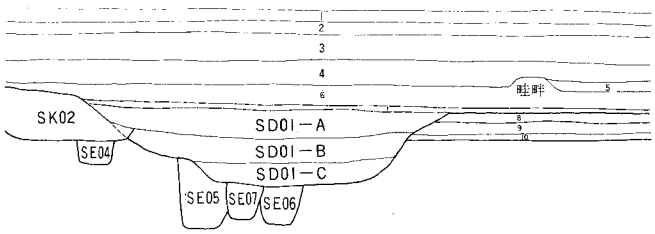

Fig. 5　層位模式図

表土・床土の下は、シルト質土壌（３・４層）が水平に堆積する。マンガン、斑鉄が多く、近世水田の連続堆積であろう。６層は茶灰色のシルト質土壌で、斑鉄が多量にみとめられる。調査区東半部では６層上に粒子の粗いシルト（５層）が堆積し、南北にのびる畦畔が確認されたが、西半部はそれがなく上層との分離が困難であったため面として把えることはできなかった。５層から太い玉縁の白磁、糸切り土師器杯が出土しており、６層は12～13世紀の水田と推測される。ＳＤ01は６層水田下の整地層（７層）の下に検出された。東端は縄文晩期末～７世紀末までの土器を包含する８層から掘り込み、下底面は八女粘土層である。土坑ＳＫ02はＳＤ01－Ｂの埋土を掘り込み、ＳＤ01－Ａの埋土が覆う。ＳＫ02下に検出されたＳＥ04とＳＤ01－Ｃとの関係は不明である。ＳＤ01底面下で検出されたＳＥ05～07は、ＳＤ01－Ｃに先行する。

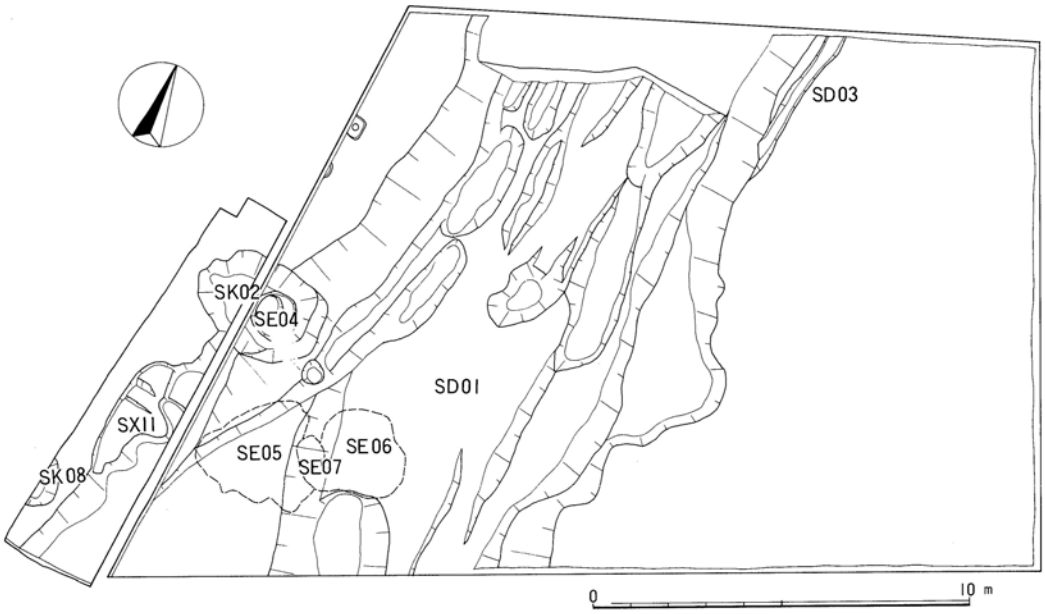

Fig. 6　B－12b調査区遺構配置図（1：200）

検出遺構

ＳＤ01　高畑遺跡台地東縁辺を南から北に流れる溝。幅10～14ｍと出入りがある。深さは約２ｍ、Ｂ－12ｃ調査南端、さらにＡ・Ｂ－13調査区トレンチまで含めて延長 130ｍ以上、さらに南・北にのびる。埋土に顕著な差異があり、流路が追跡できるため、上からＡ・Ｂ・Ｃとした。Ａは黒色粘土を主体とし、水の流れがほとんどない溝の最終埋没期である。Ｂは溝の西半に細粒のシルト、東半に粗砂と黒色粘土の互層がみられ、東半部が主な流路と思われる。Ｂ－12ｂ調査区南西部の外方への張りだし部と階段状遺構ＳＸ11は、この段階で設けられた可能性がつよい。埋土Ｃは粗砂のみである。溝底面の各所にみられるえぐれ部分は、水路の移動をしめすのであろう。Ｃの堆積は50～80㎝。

出土遺物はコンテナパット約 200 箱，その⅔はＢからの出土である。遺物の出土分布では、Ｂ－12ｂ調査区が圧倒的に多く、ＳＤ01（Ｂ－12ｃ調査区）以南は、著るしく減少する。溝は７世紀末以前の遺物包含層（８・９層）を切り込んでいるため、Ａ・Ｂ・Ｃとも夜臼期以降の遺物を含む。

Ａの埋土からは瓦、塼、白磁、青磁、円面硯、土師・須恵器、木製品（曲物）が出土。Ｂの埋土からは青・白磁を除く各種、木製品では鳥形、舟形、斎串、陽物形製品、木簡、曲物、鎌の柄などがある。Ｃの埋土では須恵器が主体をなし、瓦、塼、土師器の出土は少い。

Fig. 7　ＳＤ01埋没状況断面（南から）

ＳＫ02　Ｂ－12ｂ調査区の台地と溝ＳＤ01の一部に重複して検出された。ＳＤ01－Ｂの埋土を掘り込み，Ａの埋土で覆われている。平面形は不整な円形（東西 3.6ｍ、南北 2.5ｍ）、深さ 0.6ｍ、埋土は黒褐色粘質土である。少量の瓦、塼と須恵器、土師器が出土した(コンテナパット１箱)。

ＳＤ03　Ｂ－12ｂ調査の北よりに検出。ＳＤ01東端を平行に走り、南端でＳＤ01と重複する。検出した長さ８ｍ、幅・深さ 0.3ｍである。ＳＤ01より古い。埋土は黒褐色土。少量の須恵器、土師器片が出土した（コンテナパット 0.4箱)。８世紀前半の埋没。

ＳＥ04　ＳＫ02底面下に検出された素掘りの井戸、埋土は黒褐色粘質土である。ＳＫ02より古い。径 1.3ｍ、深さ 0.5ｍ（底面標高 8.4ｍ）、八女粘土を掘り込んでいる。須恵器、土師器片が出土（コンテナ 0.3箱）

ＳＥ05　ＳＥ01底面下に検出した。平面は不整円形を呈し、東西 2.3ｍ、南北 2.1ｍ、深さ 1.1ｍ（底面標高 7.4ｍ）。八女粘土を掘り込んでいる。須恵器、土師器が出土した（コンテナパット２箱)。６世紀前半。

ＳＥ06　ＳＥ01底面下に検出した。ＳＥ07と重複し、ＳＥ07より古い。平面は不整な円形、東西 1.7ｍ、南北 2.1ｍ、深さ 1.1ｍ(底面標高 7.1ｍ）の素掘りの井戸である。埋土はローム小塊を含む黒色粘質土。須恵器、土師器が出土（コンテナ２箱)。６世紀

ＳＥ07　ＳＤ01底面下に検出。ＳＥ05・06と重複し、もっとも新しい。平面は径 1.1ｍの円形、深さ 1.1ｍ（底面標高 7.2ｍ）の素掘りの井戸である。埋土はローム塊を多量に含む黒色粘土。少量の須恵器、土師器が出土（コンテナ１箱)。８世紀前半。

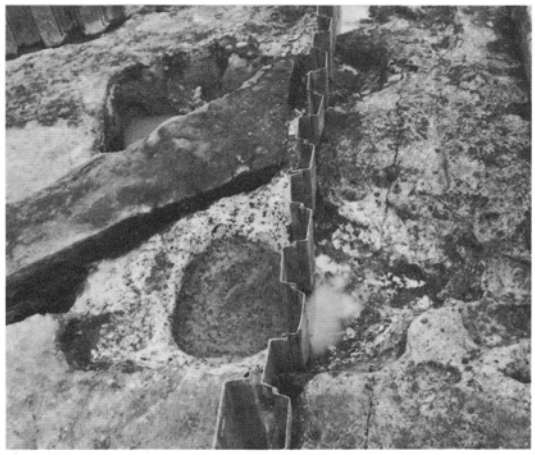

Fig. 8　ＳＫ02、ＳＥ04(北から)

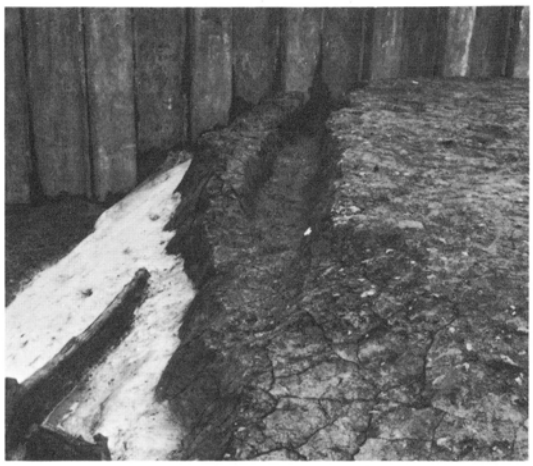

Fig. 9　ＳＤ03（南から）

Fig. 10　ＳＥ06・07(北から)

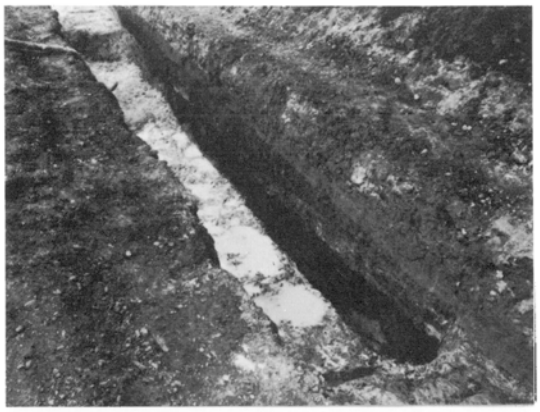

Fig.11 SK09（北から）

Fig.12 SX11（南東から）

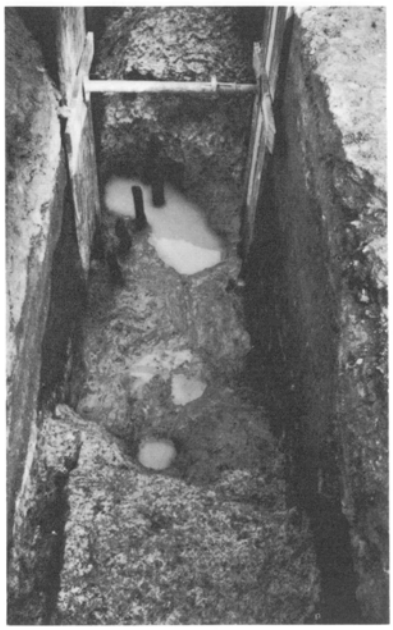

Fig.13 SD10（北から）

SK08 SD01の西、台地上に検出された。調査区外に拡がるため西半は未調査である。南北 0.8m、深さ 0.4m、埋土は黒褐色粘質土。土師器甕、高杯など出土（コンテナ 0.5箱）。5世紀前半。

SK09 B－12c調査区の台地上に検出した。幅1mのトレンチのため詳細は知りえない。トレンチにかかった南北辺は 8.5m、深さ 0.6mである。埋土は上下2層に分れる。上層は暗茶褐色粘質土、少量の須恵器、土師器、円面硯、瓦、塼が出土した。下層は焼土、灰、炭化物、窯壁を含む黒色粘質土、瓦、塼、須恵器、土師器が出土した（コンテナ3箱）。瓦、塼のなかには窯壁の付着したもの、瓦・塼の溶着したものなどがあり、近接して瓦窯が存在した可能性を示唆する。

SD10 B－12c調査区中央に検出した。SD01にほぼ直角に交わる。幅 3.3m、深さ 1.2m、埋土は黒色粘質土と砂の互層、底面近くは細砂層である。SD01に接続する部分にSD01に沿う杭列がある。瓦、塼、須恵器、土師器が出土した（コンテナ0.5箱）。

SX11 B－12b調査区のSD01西岸部に検出された幅0.9mの階段状施設である。段は3段、上端から下端まで 0.4m下る。下底にわずかな平担面（2.0×0.9m）がある。

Fig.14 B－12c調査区風景（北から）

出土遺物

1　瓦・塼(Fig. 15. 16)

ＳＤ01、ＳＫ09から多量に出土した（コンテナ120箱)。前述したように、ＳＫ09の下層からは溶着した瓦・塼、窯壁などが出土し、近接して瓦窯址が設けられていた可能性がつよい。

軒瓦（１～５）　軒丸瓦10点、軒平瓦３点が出土した。軒丸瓦は、瓦当面径17cm、中房に13個の蓮子（１＋４＋８）を配する複弁８弁蓮花文の鴻臚館系である。外区内縁に32個の珠文をめぐらし、外縁は無文の斜縁でおわる。弁間には楔形の間弁があるが明瞭さを欠く。

軒平瓦は２種ある。４は瓦当面長32cm、左右端から中央に向う波状文に２～３本の唐草を配し、波状文の先端を中央で対向させる均正唐草文である。外区上縁に22個、下縁に20個の珠文がある。太宰府蔵司前面域出土瓦に同范[1]がある。４は無顎だが、段顎のものもある。いづれも凸面は縄目叩き、４の両側縁は凹・凸面をヘラ削りしている。一枚作りの可能性がある。いま一種（５）は、右から左に流れる扁行唐草文、外区上縁に珠文、下縁に内行の凸鋸歯文を配する。凸面は縄目叩き、側縁をヘラ削りしている。

丸・平瓦（６～８）　未調理の状況なので、概要のみ記す。丸瓦は玉縁を有するものと行基葺がある。出土比率は約８：２である。玉縁を有するものは凸面をすり消すが、わずかに縄目の叩きが残る。側縁は内面からの分割面を残すものとヘラ削りの調整を加えたものがある。行基葺丸瓦は、凸面の叩き目をほとんどすり消す。両側縁は半截の分割面を残すものが多い。

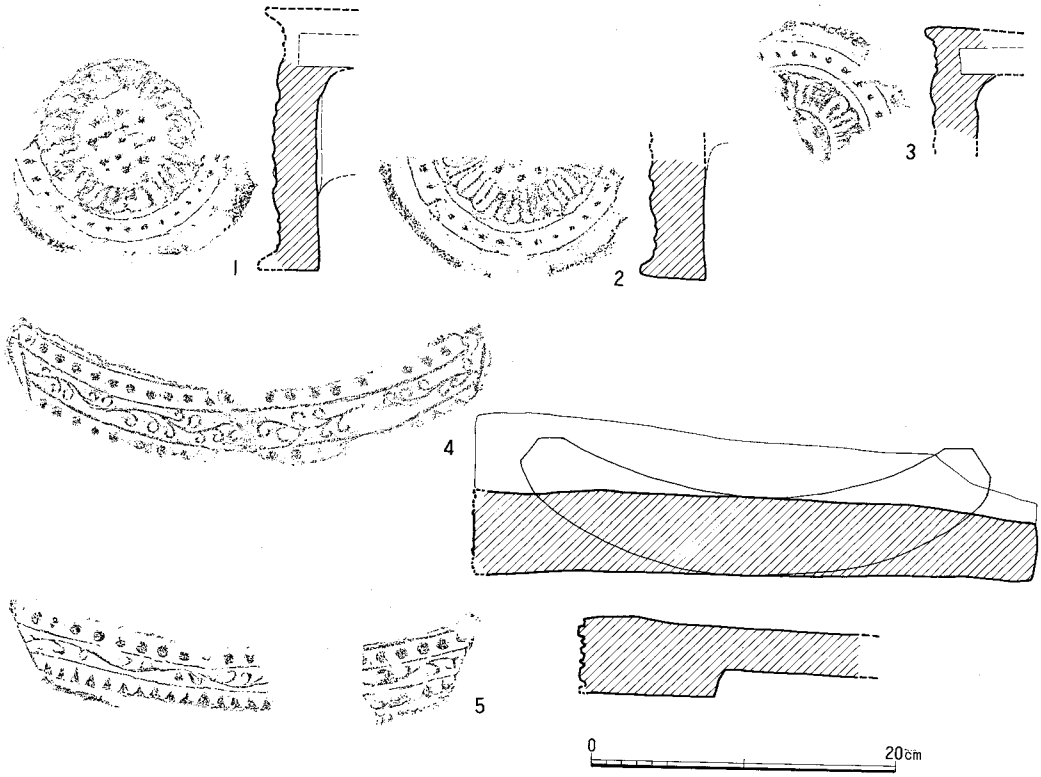

Fig.15 軒瓦実測図（1：5）

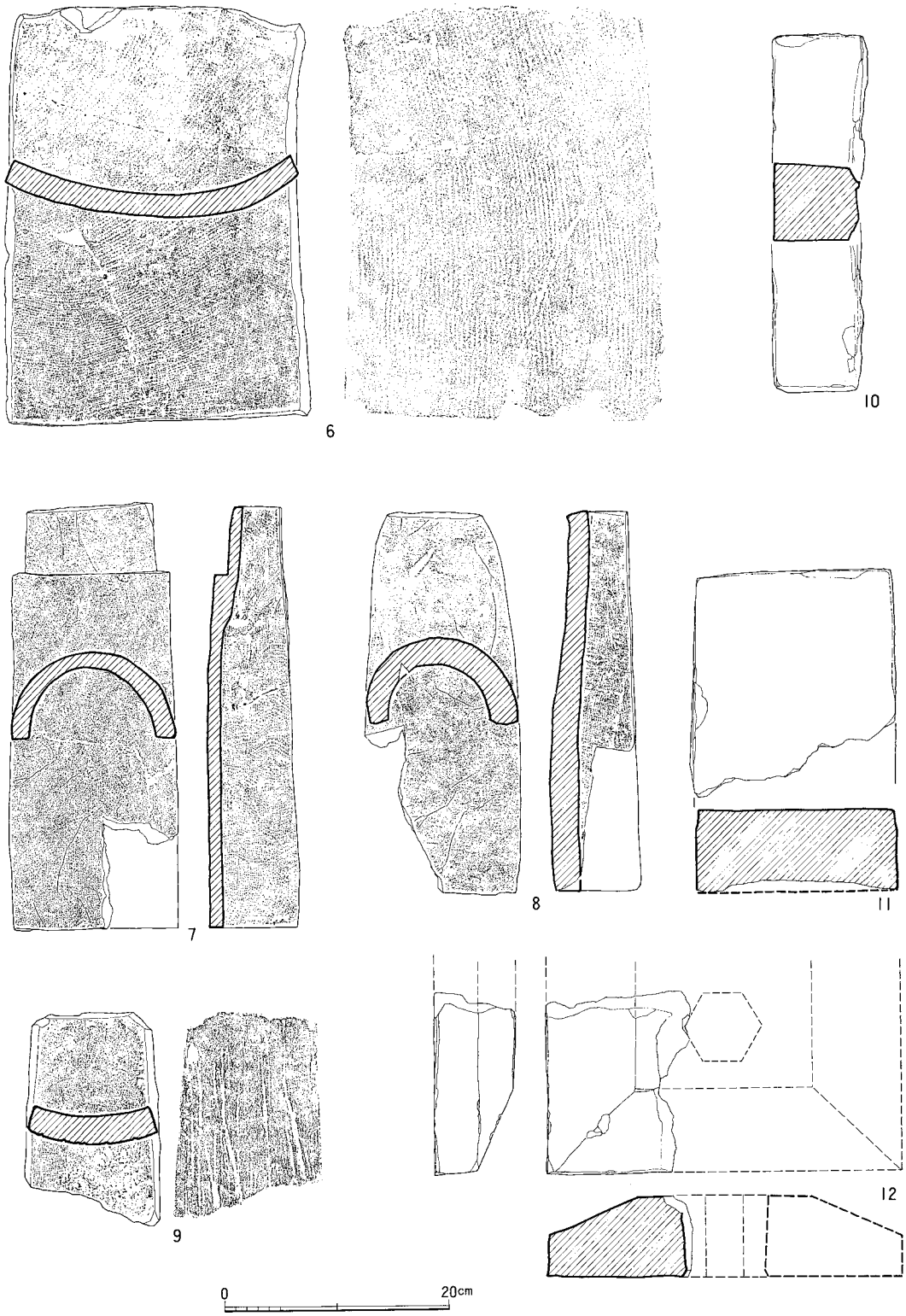

Fig. 16　丸・平瓦、熨斗瓦、塼実測図（1：6）

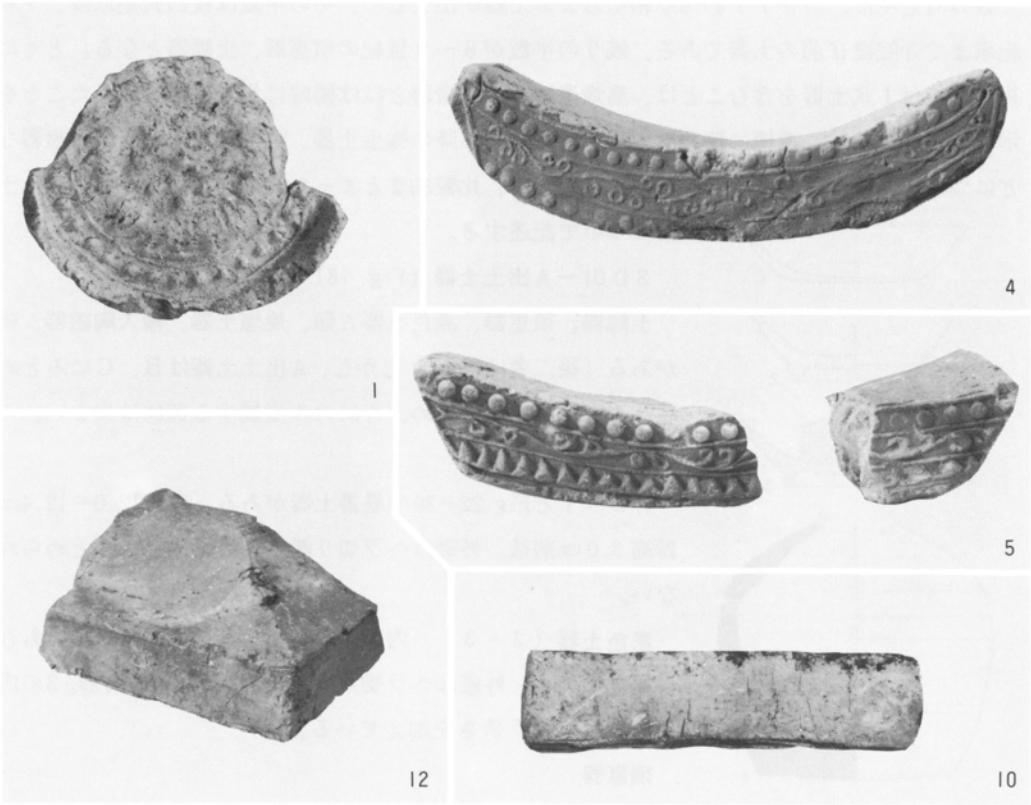

Fig. 17　瓦・塼

平瓦は凸面の叩き目に縄目と格子目がある。格子目叩きの平瓦は、全体の数%にすぎず、全体を知りうる破片がない。縄目叩きの平瓦は、狭・広端幅の差が少ないもの、凸面にいわゆる離れ砂を使用したものがみとめられる(6)。両側縁はほとんどヘラ削り調整を行っている。こうした一群は凹面に顕著な板状模骨痕のないものが多く、一枚作りの可能性がつよい。

道具瓦（9）　平瓦を生乾きの段階で分割した熨斗瓦がある。両側縁のうち、片側縁は凹面からの分割痕を残し、片側縁はヘラ削りの調整を加える。凸・凹面ともすり消しているが、完全でない。なお凹面にスサ入り粘土がうすく付着している。

塼（10～12）　長方塼と台座様の特殊形態のものがある。長方塼では完形になるものがないが、半折したもの（10）からみて、長さ31cm、幅18cm、厚さ7～8cmあまりである。

台座様の特殊塼（12）は小破片であるが、平城京左京三条二坊出土品[2)]を参考にして、復原図化した。塼の上面四辺を斜めに切り落し、中央部を長方形に削り残した載頭四角錘台を呈し、中央部に仕口孔を穿つ。仕口孔は、図の左辺に対して斜めに切り込まれており、上・下辺に平行する形状と推定すると図のような六角形になる。平城京例の仕口孔は四角形で2個所に穿れており、本例も同様であろう。底面を除く各面は丁寧にナデ調整されている。高さ7.2cm。

2　土器

ＳＤ01を主に、コンテナ約100箱におよぶ土器が出土した。その半数は夜臼式期以降、７世紀末まで寺院建立前の土器である。残りの半数が８～９世紀の須恵器、土師器となる。とくに夜臼・板付Ⅰ式土器を含むことは、高畑遺跡も板付遺跡とほぼ同時に集落が形成されたことを示唆する。しかし、遺構に伴わない憾みがあり、以降の弥生土器、古墳時代土師器、須恵器などについては機を改めて報告したい。ここでは、比較的まとまった内容をしめすＳＤ01出土土器について記述する。

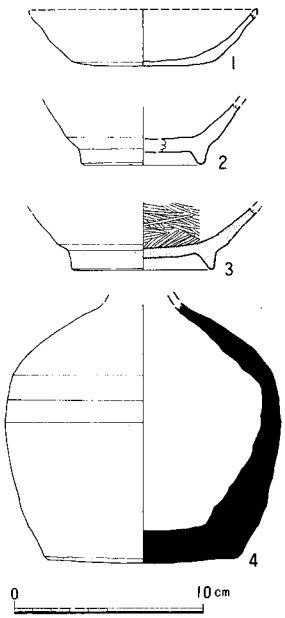

Fig.18　ＳＤ01－Ａ出土土器

ＳＤ01－Ａ出土土器（Fig. 18）

土師器、須恵器、黒色土器Ａ類、焼塩土器、輸入陶磁器、硯がある（後二者は後述）。しかし、Ａ出土土器はＢ、Ｃにみとめられるものが大半を占め、Ａにのみ帰属する個体は少ない。

土師器

杯Ｄ　１とFig.22－20の墨書土器がある。口径12.0～12.4cm、器高3.0cm前後。外底はヘラ切り離し、板目圧痕はみとめられない。

黒色土器（２・３）　内面のみを燻べらせたＡ類の椀である。口縁部を欠く。外底はヘラ切り離し、高台は低い三角形。3の内面は細かいヘラ研きを加えている。

須恵器

壺（４）　口縁部を欠く。底部は粗いナデ調整。器壁が厚く、内面にロクロナデの凹凸が著るしい。

ＳＤ01－Ｂ出土土器（Fig. 19）

土師器、須恵器、黒色土器Ａ類がある。土師器甕については未整理なので省略する。なお、供膳具での土師器、須恵器の構成比はおおまかに６：４と土師器が多い。

須恵器

蓋（１～４）　口径から、Ⅰ（12cm前後）、Ⅱ（14cm前後）、Ⅲ（16～18cm）に三分できる。いづれも天井部はヘラ切り離し、ナデ調整である。口端は純い三角形のものが多い。つまみは低い擬宝珠形、ボタン形である。

杯Ａ（５～10）　５・６は口径９cmほどの小形品、数は少ない。７～10は、口縁12.8～14.0cmで、蓋Ⅱに対応する。外底はヘラ切り離し、粗いナデ調整である。底・体部の境は明瞭、体部下半に回転ヘラ削りを加えるもの（７・９）がある。

杯Ｂ（11～14）　蓋に対応して、口径はⅠ（11cm前後）、Ⅱ（13cm前後）、Ⅲ（15～17cm）に三分される。外底はヘラ切り離し、ナデ調整である。高台は低い方形、台形が多い。

Ⅲ（15・16）　口径によって、Ⅰ（16cm前後）、Ⅱ（18cm前後）、Ⅲ（20cm前後）に三分される。図示した２点はⅠ、外底はヘラ切り離し、ナデ調整である。底・体部の境は明瞭。

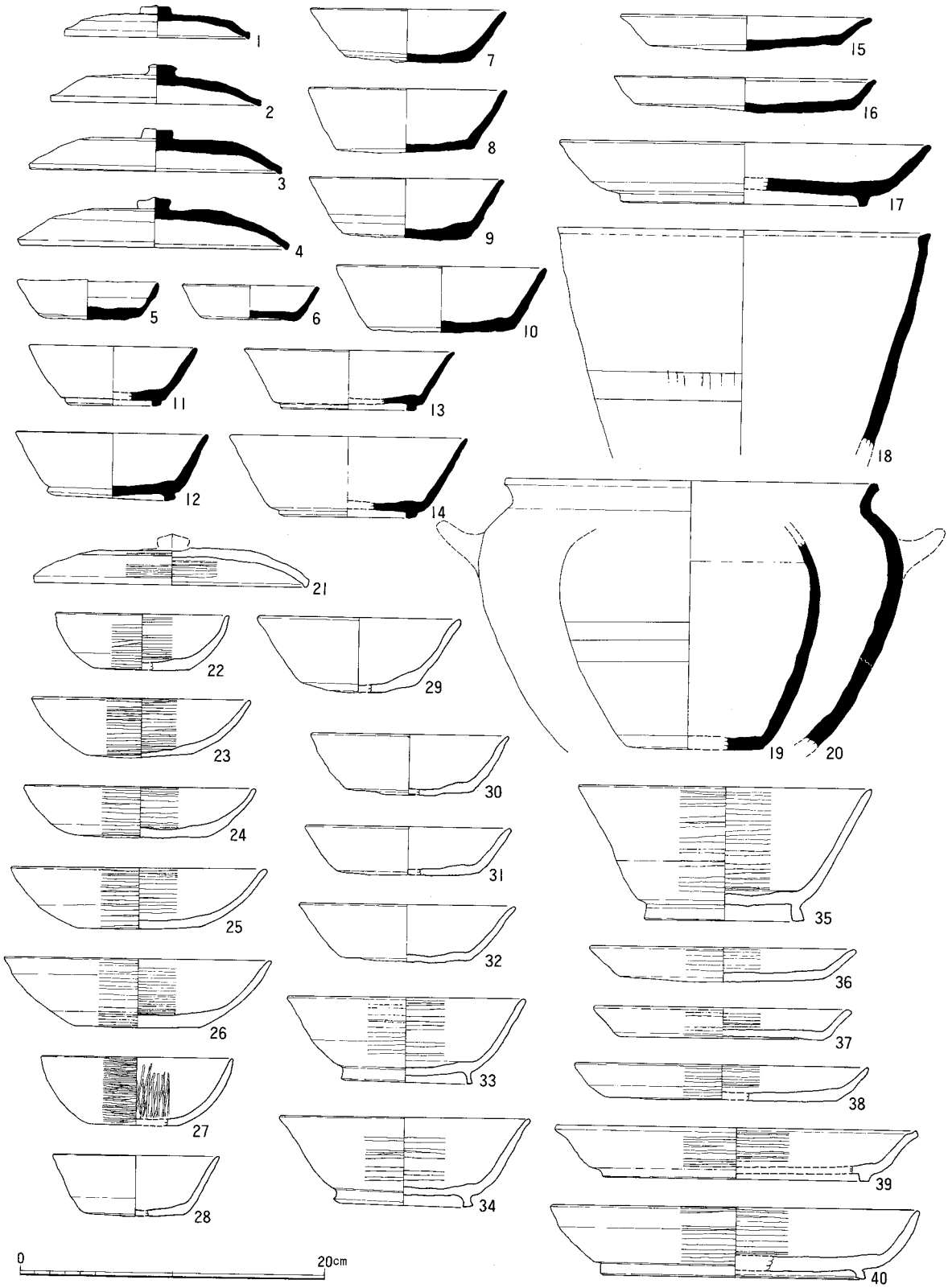

Fig. 19　SD01－B出土土器実測図（1：4）

台付大皿（17）　口径24.5cm、外底は回転ヘラ削り、体部下半に回転ヘラ削りを施す。

鉢（18）　体部下半を欠く。口径24.4cm、口端面は拡大され、わずかに内傾する。体部外面の中位以下は回転ヘラ削り、内面ヨコナデ。

壺（19）　体部上半を欠く。外底は回転ヘラ削り、体部中位以下も同様である。

甕（20）　体部下半、把手を欠く。体部上位以下を回転ヘラ削り、内面はヨコナデ。

土師器

蓋、杯A・B・C・D、皿、台付大皿、甕、カマドがある。

蓋（21）　口径から、Ⅰ（13～14cm）、Ⅱ（16cm前後）、Ⅲ（18cm前後）に三分される。21はⅢである。つまみを欠く。内外面とも回転ヘラ研きを施す。

杯A（22～26）　蓋に対応して、口径から三分されるが、Ⅱはバラつきがある。体部から外底は回転ヘラ削りを施し、外底を除く内・外面を回転ヘラ研きを加える。

杯B（33～35）　杯Aと同じく回転ヘラ研き調整を加えた高台付の杯。蓋Ⅰに対応する口径の小形品はみられない。Ⅲは口径に比して杯部が高い。高台は細くて高いもの、太く高いもの、やや外方にふんばるものがある。外底は回転ヘラ削りである。

杯C（28・29）　口径に比較して器高が高い。ヘラ研き調整はない。28は体部下半に回転ヘラ削り、外底をナデ調整する。29の外底はヘラ切り離し、不調整である。２点のみの出土。

杯D（30～32）　杯Aとは器形、調整手法のうえで大きな差異があり、むしろ須恵器杯Aと手法（成形、調整）を同じくし、器形も類似する。口径13.0～14.2cm、器高3.3～4.0cm。外底はヘラ切り離し、粗いナデ調整、板目状圧痕はない。31は口縁部に煤が付着し、灯火器に使用されている。

皿（36～38）　口径から三分される。36・37はⅡ（17cm）、38はⅢ（19.4cm）である。底・体部の境は明瞭。外底は回転ヘラ削り、外底を除く内・外面に回転ヘラ研きを施す。

台付大皿（39・40）　口径24.0～24.5cm。39の口端内面はゆるい稜がつく。高台は台形。外底は回転ヘラ削り、外底を除く内・外面に回転ヘラ研きを加える。

黒色土器A類（27）　一点のみの出土・口径12.8cm、器高4.4cm。体部は丸みをもつ。外面は横位、内面は縦位の細かいヘラ研きを加える。こうした器形、調整手法は筑前にはみられず、筑後の製品と思われる。

ＳＤ01－Ｃ出土土器（Fig. 20）

須恵器、土師器のみで黒色土器を含まない。供膳形態での須恵器、土師器の構成比は、おおまかに８：２と圧倒的に須恵器が多い。

須恵器

蓋（１～９）　Ｂ出土蓋と同じく、口径からⅠ、Ⅱ、Ⅲに三分される。天井部は、ヘラ切り離し後に回転ヘラ削り調整を加えるものと、粗いナデ調整のものがある。口端部は純い三角形をなすもの、嘴状のものがある。Ｂの蓋と比較して、天井部の高いものが多い。つまみは擬宝珠形、低い擬宝珠形、ボタン形のものがある。５・６は内面を硯に転用したもの。

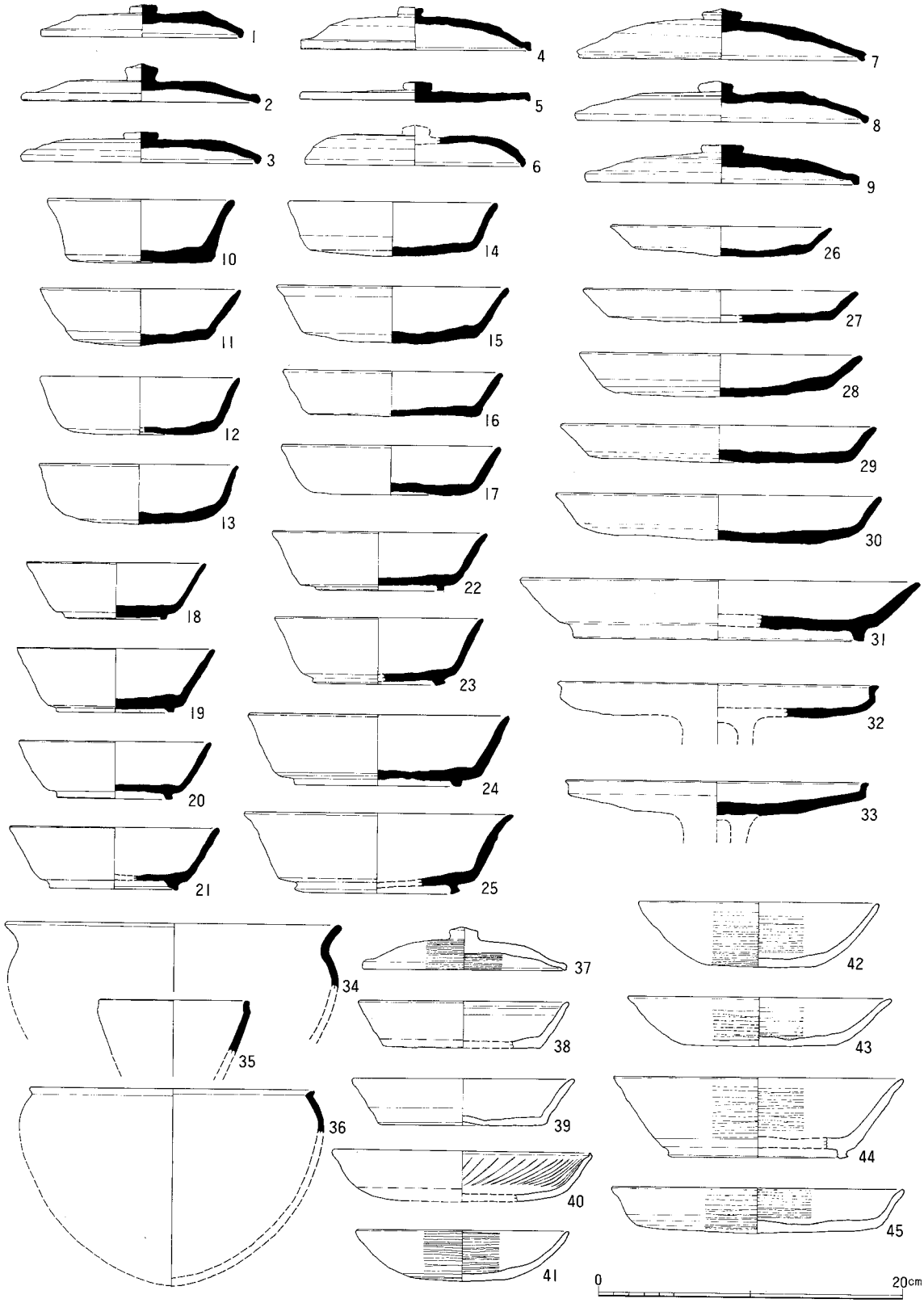

Fig.20　SD01－C出土土器実測図（1：4）

杯A（10～17）　10は口径に比して底径が大きい。11～17は口径13.0～14.8cm。底・体部の境は丸みをもち不明瞭である。外底はヘラ切り離し、粗いナデ調整。体部下半を回転ヘラ削りしたもの（10）もある。

杯B（18～25）　蓋に対応して、Ⅰ、Ⅱ、Ⅲに三分される。その大きさはSD01－Bとほとんど変らない。外底はヘラ切り離し、ナデ調整が多く、まれに回転ヘラ削り調整がある。高台の形態は多様だが、外方にふんばるものが目だつ。底・体部の境は総じて丸みをもつ。

皿（26～30）　口径によって、Ⅰ（15cm前後）、Ⅱ（18cm前後）、Ⅲ（20cm前後）に三分される。外底はヘラ切り離し、ナデ調整。底・体部の境は丸みをもち、不明瞭なものが多い。

台付大皿（31）　口径26cm、器高4.0cm。外底はヘラ切り離し、ナデ調整。

高杯（32・33）　ともに脚部を欠く。口径19.8～21.8cm。32の杯部は、底・体部の境は丸みをもち、口端部は若干拡大される。32の底部は回転ヘラ削り、33の底部はナデ調整である。

鉢（34～36）　いづれも体部下半を欠く。34は口縁部のわずかに外反するもの、35は口縁部が短く立ちあがる。36は鉄鉢形である。

土師器

蓋（37）　口径18cmの大形品もある。37は口径13.7cm。口端は短くのびた三角形。天井部はヘラ切り離し、回転ヘラ削り調整。つまみを除き、全面にヘラ研きを加える。

杯（38～43）　体部の内・外面に回転ヘラ研きを加えた杯A（41～43）、畿内からの搬入土器（40）、筑前ではみられない一群（38・39）がある。杯Aは器形バランスに多様さをみせるが、外底の回転のヘラ削り調整、研き手法は同一である。40は口径17.0cm、器高3.3cm、底面は不調整（a0）、内面はラセン文（不明＋斜方斜状文）を加えた平城宮Ⅲタイプで、胎土分析によれば平城Ⅱ群土師器に近似する[4]。38・39は口径に比して底径が大きく、器高が低い。外底はヘラ切り離し、ナデ調整、39の内底は不調整である。あえて形態・手法の近似例を求めるならば、豊後国分寺出土の杯b[5]がもっとも類似するが、資料を見ていないので豊後からの搬入品か否か不明。

杯B（44）　杯Aの手法をもつ高台付杯。口径19.0cm、器高5.2cm。体部は直線的に外開する。高台は低く、外方にふんばる形態である。

皿（45）　口径19cm、高2.9cm。底・体部の境は丸みをもち不明瞭である。外底は回転ヘラ削り、外底を除く器表は回転ヘラ研きを加える。

3　焼塩土器（Fig. 21－9～12）

型作りで円筒形を呈し、内面に布目痕を残す。外面は粗いナデ調整、器表の凹凸が著るしい。口縁端部は筒単につまむだけである。内面の布目には精粗の二種がある。布目の細かいものの一つのデーターは、1cmあたり経糸56本、緯糸24本である[6]。ほとんどの破片は2次的焼成のため赤変し、細片化している。SD01各層から出土（コンテナ0.3箱）。

4　輸入陶磁器[7]（Fig. 21）

白磁（4）　小さな玉縁をもち、外底が幅広の蛇ノ目高台をなす椀（Ⅰ－1類）。復原口径

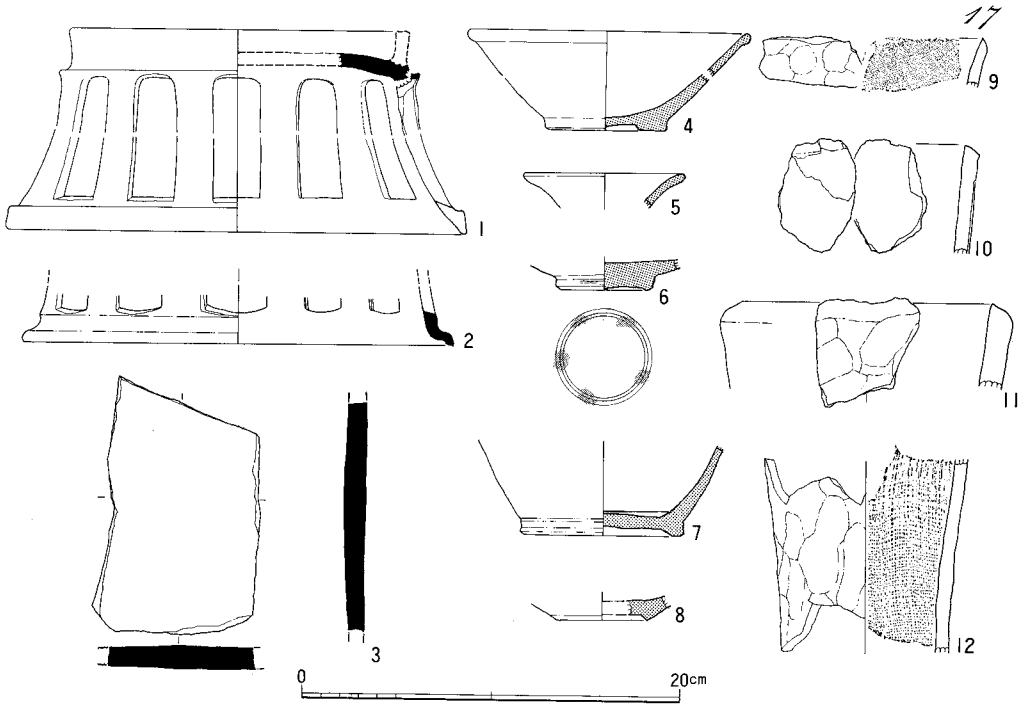

Fig.21　焼塩土器、輸入陶磁器、硯 実測図（1：4）

14.4cm、底径6.6cm。胎は密で精良、灰白色である。白い化粧土のうえに全面にうすく釉をかけ、畳付の釉をカキ取る。釉は白色、釉だまりは青白色をなす。貫入はない。刑窯の製品。[8)]

越州窯系青磁（５～７）　図示したほかに椀Ⅰ類の口縁部破片が２点ある。５は水注の口縁部。胎は密で精良、灰色。釉はやや厚めにかけられ、褐色みのある青緑色、細かい貫入が入る。６は杯か皿である。高台は低い輪状をなす。釉は全面にうすくかけられ、畳付はカキ取る。黄緑色。畳付の５個所に白砂の付着した目跡がある。７は水注の底部。暗灰色の緻密な胎にうすく施釉し、畳付の釉はカキ取る。淡い緑褐色。

長沙窯系青磁？（８）　外底は碁笥底状をなす。器形不明。胎はやや粗く淡い黄白色。白い化粧土のうえに黄褐色の釉を厚めにかけるが、剝落が著るしい。以上ＳＤ01－Ａ出土である。

５　硯（Fig. 21）

台付円面硯（１・２）　ともに小破片のため圏足の透し孔数は不明である。１は海と陸の区別が不明確、硯部外端にめぐらす突帯は１条である。圏足には長方形の透し孔があり、上辺をまるくつくる。２は圏足端部である。下端近くで屈曲し、外方へふんばる段をなす。透し孔下辺はゆるくカーブし、左・下側辺に刻線がある（右辺は破片がないため不明）。1はＳＤ01－Ａ、２はＳＫ09出土。

（３）　外周ならびに裏面の脚を欠く。破片であるが、天地13.4cm、左右8.7cmという大きさと、直線的な断面形からみて風字硯かあるいは二面硯の可能性がつよい。裏面は板目による粗いナデ調整、火襷がみとめられる。ＳＤ01－Ｂ出土。

他に須恵器の杯Ａ、蓋の転用硯がある。一部はFig. 20に図示した。

6　墨書土器（Fig. 22・23）

墨書土器はＳＤ01からかなりまとまって出土し、合計87点を数えた。出土層位別に見ると、Ａ７点、Ｂ58点、Ｃ20点、その他２点となる。また器種的には須恵器が圧倒的に多く、全体の約78.2%を占める68点あり、その内訳は坏31点、皿18点、蓋15点、不明４点である。これに対して、土師器は坏14点、皿２点、蓋・甕（人面墨書）・台付大皿各１点の合計19点である。墨痕の明瞭なものを中心に図示したが、省略したものも含めて若干の所見を述べてみよう。

87点のうち文字はないしは記号と判推読できるものは50点存する。まず１は下半の墨痕がかすれているため「四□」のようにも見えるが、全体の形状から見て１字とみなすのが妥当であり、「岡」の異体字と解して大過ないだろう。２の「浄人」については人名とも考えられるが、すでに直木孝次郎氏が「浄人について」（『奈良時代史の諸問題』所収）において指摘されているように、一種の職名であり、その地位は仕丁よりも低く、寺内の清掃を本務とする者の称呼であろう。11など２点に「奴」が見え、13には「寺」とあり、さらにこの遺跡が寺跡と推定されることとも通じる。３はつまみに「板」と記されているが、これは９の「板刂」に通じるものであろう。『和名類聚抄』高山寺本には筑前国那珂郡の郷名として板刂が見え、まさにこの９と一致する。同書は「以多比」と訓しているが、刊本は板曳と記して「伊多比岐」と注している。現在、旧那珂郡域で板刂ないし板曳という地名あるいは通音するものなどは見出しえないが、これに近似するものとして板付（いたづけ）があり、当遺跡とも近接しているので、板刂が板付に変化し、この付近がかっての板刂郷であった可能性は十分に想定できる。また８は欠損しているため現状では「郡」しか見えないが、欠損部には固有名詞が存したのかもしれない。10に「中村」、15に「中」と見えるが、これらは郡名の那珂に通じるものであろう。４の「十九」、10の「十」など数字を記したものがあり、同類の複数的存在を示唆しているが、他には「十」とみなされるものが１点見られるのみである。19は縦棒が５本あり、50を意味するのかとも考えられるが、何らかの記号とみなすべきであろう。５は「毛□」と熟語になるが、詳細は明らかでない。６の「刀」は他に13点が見え、際立っているが、多いことの意味は明らかでない。筆跡からは２～３人の手になると推定される。７は「島」のようにも見えるが、これと近似するものが他に２点あり、それと対比すると「鳥」とみなすべきであろう。12は「小□」と２字が記されているが、第２字には筆跡とは異なる墨が付着しているため判読できない。14の「大」は他に２点が見えるが、筆跡はいずれも異なる。これに対して16の「幸」は他に３点、17の「原」は他に１点が見えるが、これらは同筆である。20は何らかの記号ないし文様であり、他に丸印を記したものが２点見られる。

以上のほか、図示しなかったが、「仁」、「豊」、「門」などの文字も見られる。

人面墨書土器（21）は、小片のため詳しいことはわからない。破片部位が甕の体部上半であり、遺存部分は眉および目の一部と思われる。

7　木簡・墨書木製品（Fig. 24・26）

木簡および墨書木製品はＳＤ01－Ｂから12点出土した。型態的には、019型式１点、032型式

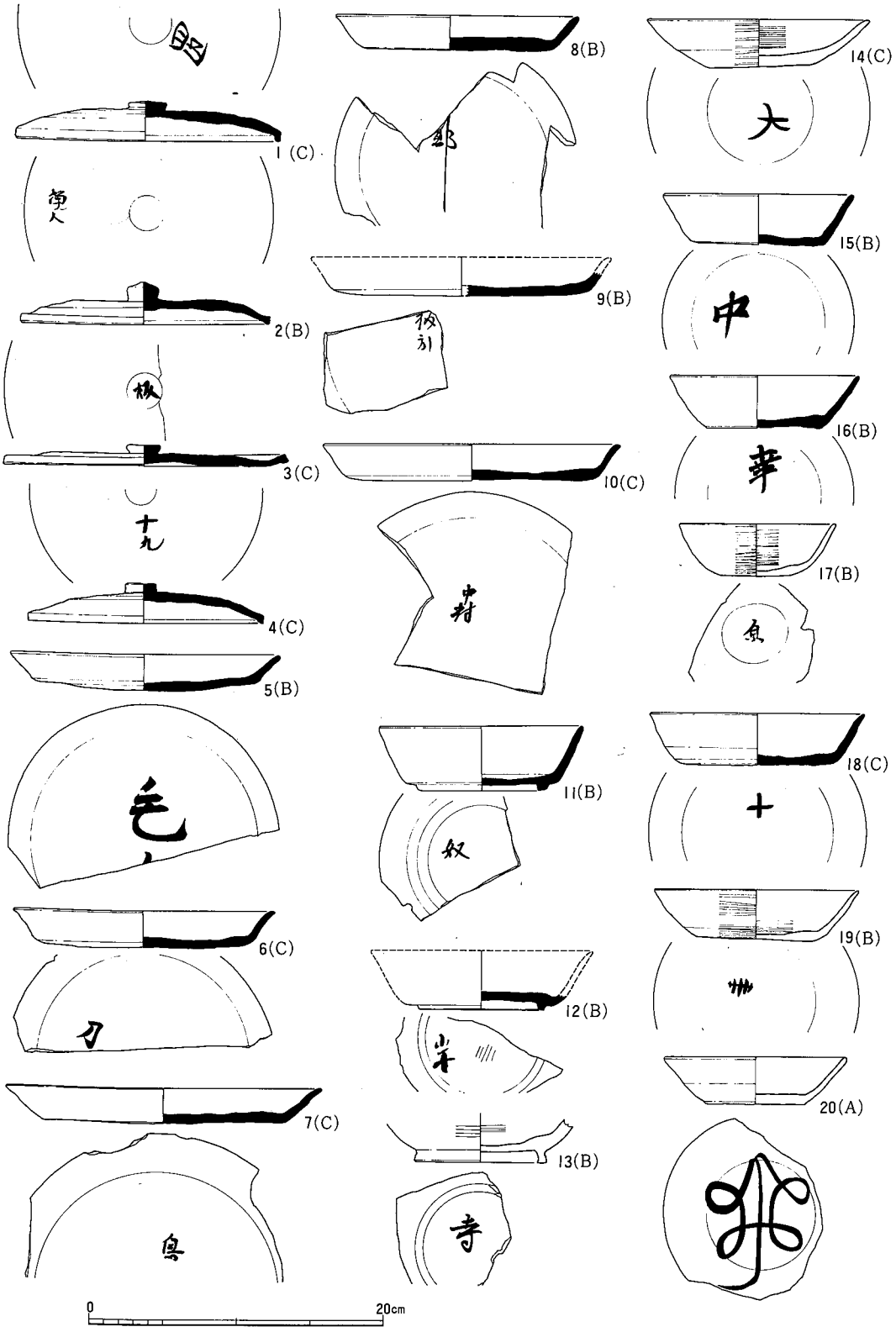

Fig. 22　墨書土器実測図（1：4）
（　）内はSD01出土層位

Fig. 23　墨書土器

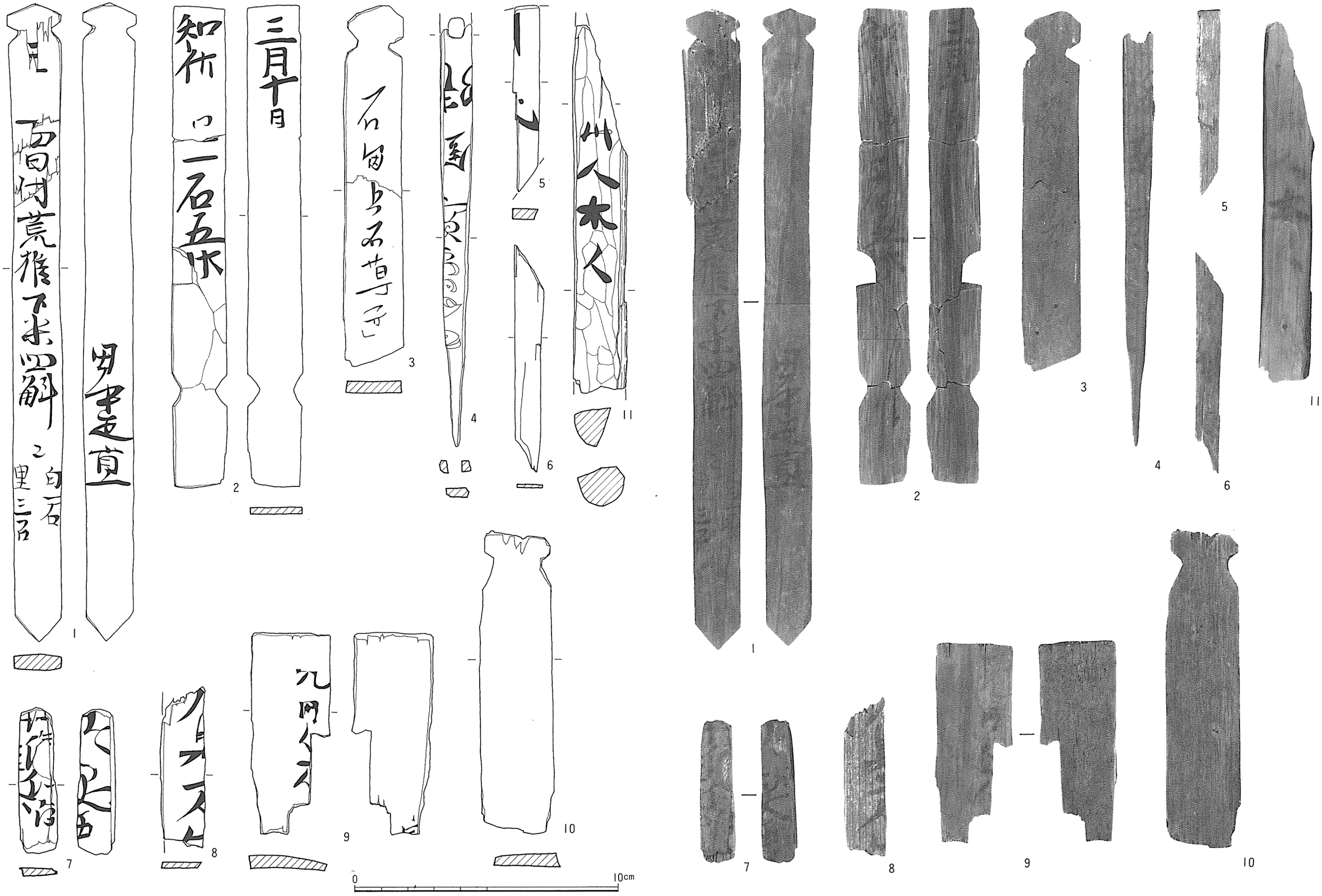

Fig. 24　木簡（2：3）

2点、039型式2点、061型式1点、065型式1点そして081型式5点に分類できる。文字については、039型式の1点には墨痕が全く認められず、019型式の1点と081型式の4点は折損などのため判読できない。以下ではそれらを除いた他の6点について報告する。

木簡1・「∨三□□四日付荒権下米四斛　之　白一石 里三石」
(月 廾ヵ)　(ママ)

・「∨田□□直」
(中ヵ)

032型式で、法量は24.1×1.9×0.4cmである。表面上端部の一部に損傷を受けているが、原形をとどめている。第3字は残存字形から「十」ではなく、「廾」と推定される。米四斛の内訳を示す割注では単位に石を用いているが、この区別の意味は明らかでない。「里」は「白」に対応するので、本来は「黒」と記されるべきものであろう。内容的には凶荒にともなう米の下行に関するものと考えられるが、遺跡の性格などをも考え合わせると、いまだ検討を要する。裏面の4文字は人名と推定されるが、記載形式などに問題が残る。とくに第3字は「五」らしく見えるが、運筆が異なり、断定はできない。

木簡2・「和□□－石五□∨」
(升ヵ)

・「三月十日∨」

下端近くに切り込みがあるので、032型式に分類した。二次的に切断されているが、ほぼ原形をとどめ、法量は18.2×2.1×0.3cmである。墨がうすく、第2・3字を判読できないので、詳細は明らかでないが、数量から見て米などの穀物にかかわるものと推定される。

木簡3・「∨石□□石□□」
(導ヵ)

032型式で、下端は二次的に切断されているが、現法量は13.7×2.8×0.4cmである。全体的に墨がうすく、判読できない。

木簡4・□金　□□□□

現状は059型式に近似するが、これは二次的に截断されたためであり、原形は明らかでない。現法量は15.9×1.2×0.4cmである。運筆から見て現状上部の2字は逆方向であり、「金□」とすべきであろうが、墨がうすいため判読できないので、詳細は明らかでない。

棒状品11　□□人木人

丸木の半面を削って墨書したもので、上端は斜めに切断している。原形などは全く推定できないので、065型式に分類した。現法量は13.9×1.9×1.3cmである。現状第1字は「小」ないし「川」に近似するが、判定できない。

曲物側板（Fig.26－16）　□□大　大大　大

曲物枠の外面に墨書されている。字間は一定しておらず、上部は小さく書かれている。内面にも若干の墨痕が見られるが、詳細は明らかでない。習書の一種であろう。

8　木製品（Fig.25・26・27）

舟形（1）　SD01－A出土。全長15.3cm、厚さ0.4cm。中央部に平坦な面をもち、両端がゆるくそり上って舟首、舟尾を表現するが、どちらが舟首になるか明確でない。片側の端部を

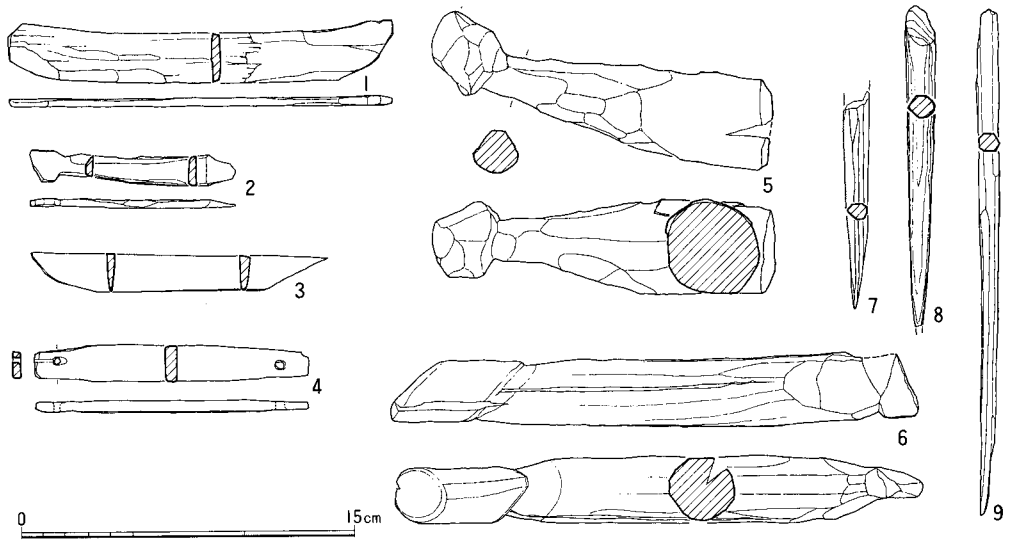

Fig.25　木製品実測図Ⅰ（1：3）

垂直に、いま一方の端部を斜めに切り落す。すべて削り面、板目材である。こうした扁平な側面を表現した舟形は他に例を知らないが、形態上舟形とした。

鳥形（2）　SD01－B出土。両側面から切り込んで小さな頭部を表現している。体部端は一面から斜めに削り落し、茎状をなす。表裏面は割面を残すか粗い削り面か不明。板目材。

刀形（3）　SD01－B出土。鉄製刀子を模倣したもの。全長13.5cm、厚さ0.4cm、刃部をうすく削りだしている。刃部が全長の⅔以上をしめ、関を斜めに切り落して表現する。背がうすく剝落している。板目材。

斎串（11）　SD01－B出土。いわゆる削り掛けである。左右辺に各4個所の切り込みがあり、平城宮分類のD類にあたる。下端部を欠き、現存長42.1cm。頭部を圭頭状に切り落し、上部2個所が上方からの、下部2個所は下方からの切り込みである。1個所の切り込みはすべて3回と思われる。最下の切り込みの下に平行する2孔を穿つ。目釘孔と思われ、使用方法の一例をしめすといえる。

陽物形木製品（5）　SD01－Bから2点出土し、一点を図示する。表皮を削った程度の心持材を使用。端部を斜めに削り落して丸くつくり、周囲からの切り込みによって亀頭部を表現する。基端部は両側辺から削り、しだいにうすく仕上げる。全長24.0cm、最大径3.2cm。

鎌柄（10）SD01－B出土。完存。全長37.8cm、刃の着装部は外方に広くなり、頭部を丸くつくる。鉄刃を着装する孔は、拡大された部分に穿たれ、その角度は柄にたいして110°～122°と上方へ開く。握りを楕円形に削り、端部にかかりの三角形の突起をつくる。精巧なつくりである。14も上端を丸く仕上げ、鉄刃を着装する孔をもち鎌柄になる可能性がある。

曲物（16～19）　底板、側板が個別に出土し、全形を知りうるものはない。SD01－A、Bから合せて30点あまりが出土した。未整理なので数点を取りあげ、詳細は別に譲る。

底板は、19の1点を除きすべて円形である。19は隅丸長方形の底板。破片のため全形は不明。

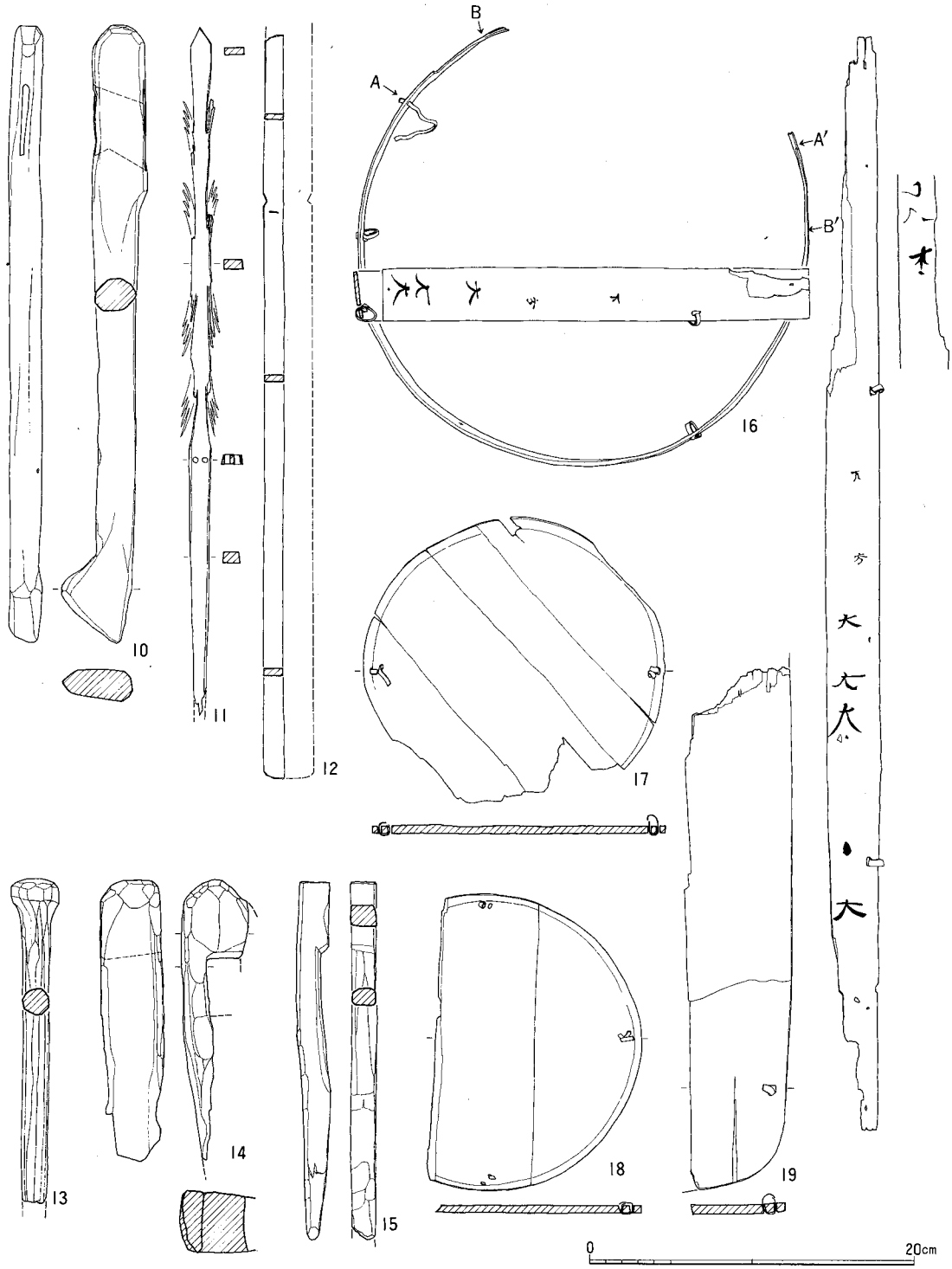

Fig. 26　木製品実測図II（1：4）

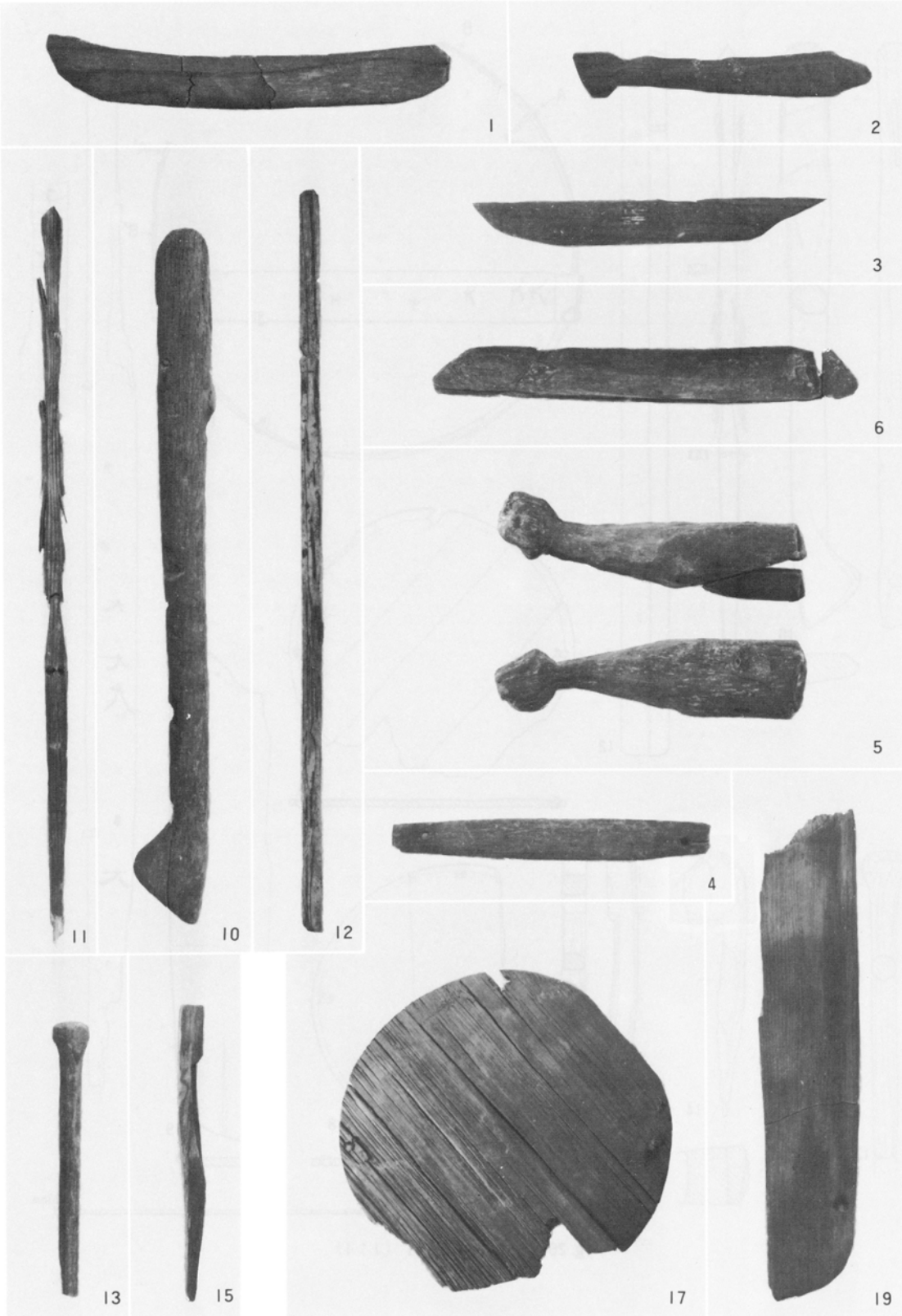

Fig. 27　木製品

現長32cm、厚さ1.2cm、柾目材である。端面はほぼ垂直に削られている。長辺側の隅に、側板を樺皮で綴り固定する孔があり樺皮が遺存する。17、18は円形の底板で、ともに柾目材である。直径18～18.5cm、端面を垂直に削る。端から0.5cmほど内側に、樺皮で側板を綴り固定させるための孔が4個所に穿たれている。孔は二個で一対となり、樺皮の遺存するところもある。底板には、あらかじめコンパスを使用して針書の円孤が描かれ、側板の位置を定めている。

側板（16）は、現在の直径28.6cmと開いているが、図のAとA′、BとB′が綴じ目になるので、復原径は18.3cmとなり、前述の底板サイズのものに用いられたことが知られる。高さ3.2cm。この側板の内外面に墨書がある（前項参照）。

箸状木製品（9）　割材を丸く加工したものだが、箸と断定するにいたらない。全長23cm。

尖頭棒状木製品（7・8）　先端を鋭く尖られたものを含めた。ともに割材を丸く加工したものである。

丸頭棒状木製品（13）　割材を丸棒状に丁寧に削り、端部の一方に丸い突起を削りだす。

その他の木製品　15は、側辺の一方を切り込んで把手状をなす。12は、上部、側縁を欠くため全形不明。現長44.5cm、幅1.3cm、側面、表裏面は丁寧に削っている。下端から35cmの側辺にV字形の小さな切り込みを入れ、その下に「一」の墨書がある。何かの物指であろうか。5は表皮を残す心持材の周囲を削り、端部の一方を頭部状にまるくつくる。丸棒部を体部と見做せば鳥形のようにも思われるが、断定しがたい。4は両端に小孔を穿った板状のものである。連結に用いるものであろうか、孔のまわりに紐づれがある。

小結

今回の調査で得られた知見を整理し、高畑遺跡・廃寺の今後の調査に備えることにしたい。

まず第一に、伴う遺構が検出されなかったが夜臼式以降、弥生前期、中期、後期前半までの土器が相当量出土したことがあげられよう（本概報は高畑廃寺関係を主としたため、これらについては略した。別な機会に報告する）。後期中葉～後半の土器はない。こうした事実は、高畑遺跡が集落として北方500mの板付遺跡とほぼ同様な推移を辿ったことをしめす。すなわち、高畑遺跡は板付遺跡において水稲耕作を開始した前後に集落が形成され、その廃絶を後期中葉とすれば板付遺跡と同じである。高畑遺跡での水田は未検出とはいえ、水利のうえでは板付遺跡と同一の水系（御笠川、諸岡川）を利用し、かつ上流に位置する。遺跡の立地状況もほぼ等しく、今後板付遺跡の全体像を復原する際、両遺跡の関係は見すごしえない視点となるであろう。

第二は、高畑遺跡の台地上に、奈良時代創建寺院址の存在が明確になったことであろう。台地縁を北流するSD01から出土した瓦、塼をはじめとする諸遺物の内容と、かつて台地上に礎石らしい大石群があったという事実は、ここに寺院址を想定することをさまたげない。われわれは、この寺院址を高畑廃寺と呼称することにした。高畑廃寺の創建年代は、SD01－C出土遺物からすれば8世紀中葉を遡る可能性がある。その廃絶期については寺院址の遺構を直接調査していないので明確にしがたい。おおまかには、SD01埋没期（A）出土土師器、輸入陶磁

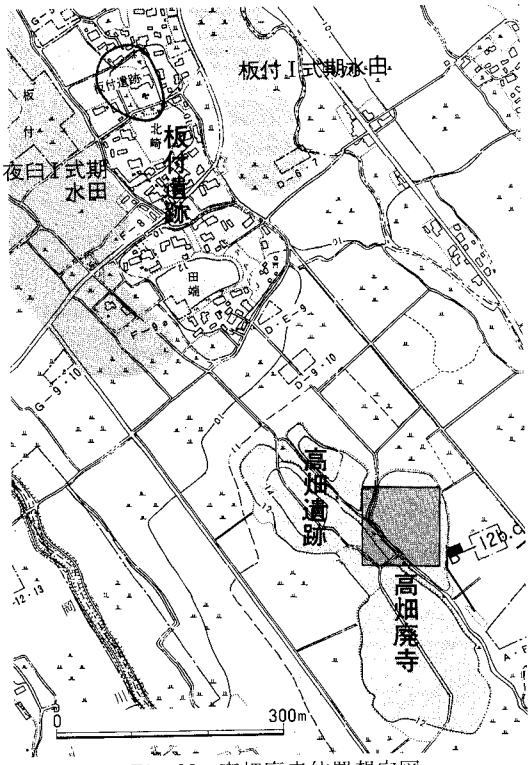

Fig. 28　高畑廃寺位置想定図

器からみて9世紀中葉～10世紀ごろという年代を推測しうるにとどまる。高畑廃寺の伽藍配置は全く不明である。しかし、その規模と方向については、かつて礎石群のあった位置の聞きこみ結果と旧地形図、さらにSD01における瓦・塼などの出土状況、加えてSD01に交わる溝SD10の検討から大まかな推測が可能である。前述したように、SD01からの瓦・塼の出土状況はSD10を境にして、その数が激減する。またSD10は小範囲の調査のため性格を断ずることは不可能だが、幅3.3m、深さ1.2mのしっかりした溝であり、あるいは寺院南限を画する可能性もある。ここでは、SD10を南限とし、旧地形にある方1町半程度の平坦面のなかにおさまる寺域を想定しておきたい。

高畑廃寺の検出によって、従来一郡一寺とされていた令制の那珂郡に、三宅廃寺[9]と高畑廃寺の二寺が建立されていたことが明らかになった。三宅廃寺は7世紀末頃の創建にかかる、いわば白鳳寺院であり高畑廃寺にほぼ半世紀先行する。詳細は別に譲るが、三宅廃寺は那珂川中流域を本貫とした氏族の氏寺的な性格が想定される。これにたいして、高畑廃寺のばあい那珂郡衙推定地（現博多区那珂）に近接した位置にあり（南へ約1.5km）、郡寺的な性格が与付されるかもしれない。令制期那珂郡の、さらに遡って古墳時代当地域の地域支配と政治動向を考えるうえでの一資料として、出土瓦の系譜、出土遺物について検討を加えてゆきたい。

注　1）『大宰府史跡　昭和56年度発掘調査概報』1982　九州歴史資料館
2）奈良国立文化財研究所編　『平城京左京三条二坊――奈良市庁舎建設地発掘調査報告――』1980　奈良市　　なおこの製品については奈良国立文化財研究所 金子裕之氏から種々教示をうけた。
3）『筑後国府跡Ⅰ』『同Ⅱ』1976、77　久留米市教育委員会
4）奈良国立文化財研究所の分析による。分析にあたっては、同所金子裕之氏のご配慮をえた。
5）『豊後国分寺跡』1979　大分市教育委員会
6）京都繊維工芸大学 布目順郎氏の鑑定による。
7）分類は次の文献による。横田賢次郎・森田勉「大宰府出土の輸入中国陶磁器について」『九州歴史資料館研究論集4』1978　なお横田・森田の両氏から種々教示をうけた。
8）中国故宮博物院調査部 馮先銘氏の鑑定による。
9）『三宅廃寺』（福岡市埋蔵文化財調査報告書第50集）1979

III　F－7e調査区

1　調査の概要

調査区の位置　本調査区は、板付遺跡環溝の南端から60m南に離れた位置にある。環溝のある板付中央台地と隣の南台地という２つの低い台地の間、中央台地寄り鞍部の緩やかな斜面に立地しており、その標高は10mを前後する。調査地区を含め、付近は宅地化が著しい。

これまでの調査　今回に先立ち、付近で実施された調査は、主に本調査区より北、環溝との間の区域で行われている。北50mを隔てたF－6a調査区[1]、それに北接する県道部分の調査区等[2]である。いずれの調査区においても弥生時代、古代末から中世を中心として遺構遺物が検出、報告されている。

F－7e調査区の調査　調査は、住宅建築に先立って、建物建築予定部 116m²について行った。要した期間は、1982年６月４日から同18日までであった。

調査地は、もと納屋が建っており、そのためか、場所によっては遺構確認面に至るまで整地のための砂等がみられた。そういった20～40cmの厚さの表土下、遺構確認面は鳥栖ロームが露出しており、その60cm程下は、いわゆる八女粘土になる。

全体図に示すように、全面に大小の掘り込み状のものがみられるが、その時代をみると、近世或いは近・現代のものが大部分である。それらは井戸と思われるものの他は、ゴミ穴とでもいうような意味不明の土坑等である。それらからは遺物としては、染付を中心とした陶磁器類又、寛永通宝等が検出された。そういったもの以外の、特に中世以前の遺構とみられるものは、

Fig. 29　F－7e調査区全景

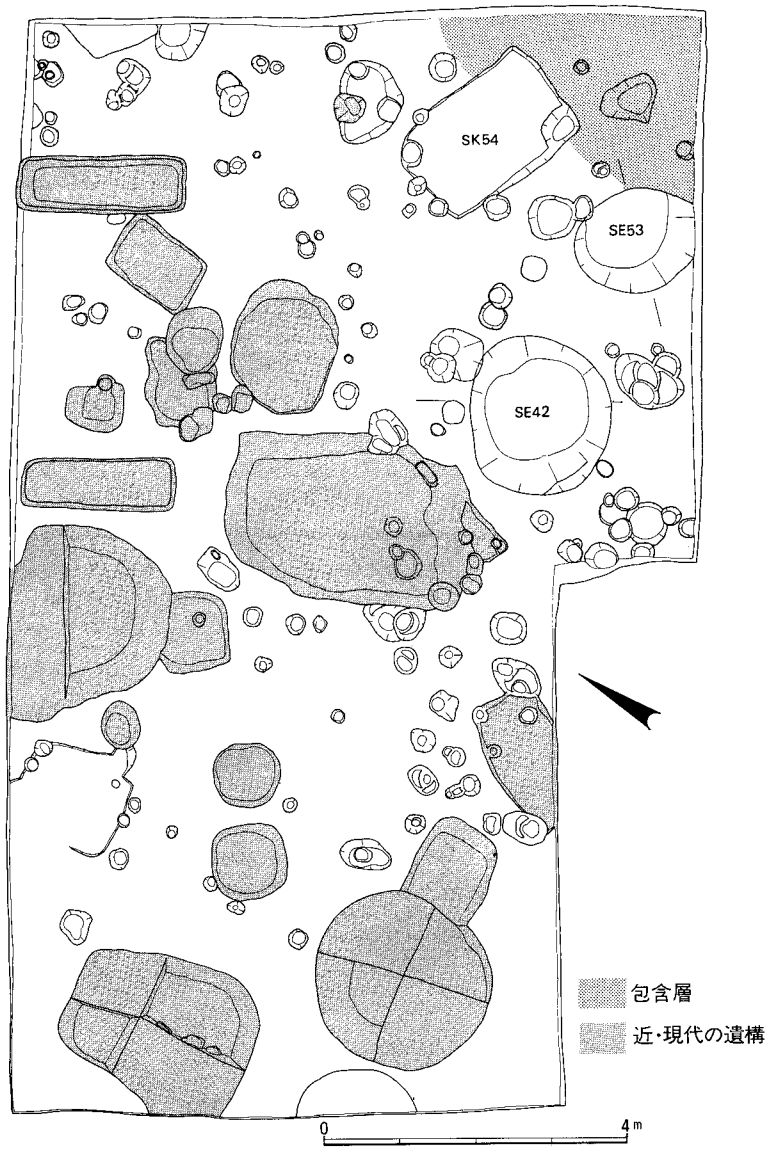

Fig. 30　F－7e 調査区全体図（1/100）

土坑１、井戸２の他は若干のピットをあげることができるのみである。これらにみられる覆土は、暗赤褐色或いは黒褐色のいずれも粘質土であることが多い。ピットは掘立柱建物の柱穴であることを考え、図上で復原を試みたが、確実と思えるものは、見いだせなかった。

ところで、SK54、SE53は、一部黒褐色粘質土層を掘り込んでいるが、この層からは弥生式土器破片が多量に出土した。それの示す年代は、前期から中期後半までに渡っておりかつ、遺存状態の良好なものを多く含むようである。包含層とする。

2　遺構

土坑 SK54（Fig. 31）　調査区南東部分、一部包含層にかかっている。平面形は不整な長方形で、断面は低い逆台形となる。長軸長 220cm、短軸長 145cmを測り、深さは現状で、40cm程である。覆土は全体に一様で、ロームの小ブロックを含む暗褐色粘質土である。覆土中より、弥生式土器・土師器細片を検出した。

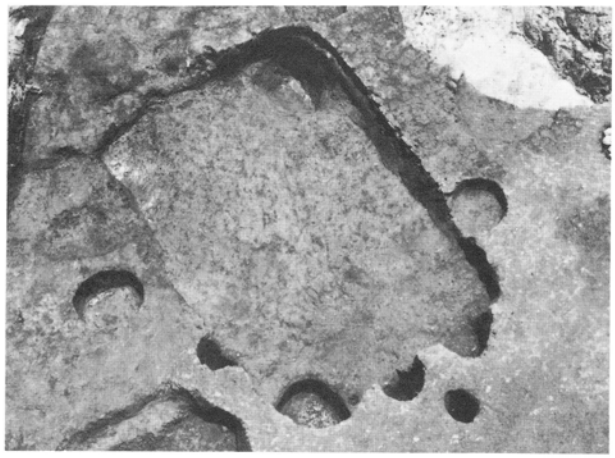

Fig. 31　SK54

井戸 SE42（Fig. 32・33）　調査区東半部南辺沿いにSE53と隣接し・東西方向に並んでいる。確認面での平面形は、長径240cm・短径155cmを測る不整な楕円形で、深さは現存値 120cmを測る。湧水線といわれる、鳥栖ロームと八女粘土の境界部で壁が深くえぐれており、水のしみ出す状態にあったことは考えられよう。この部分で平面規模が最大となり、径 230cmを測る不整な円形を呈す。

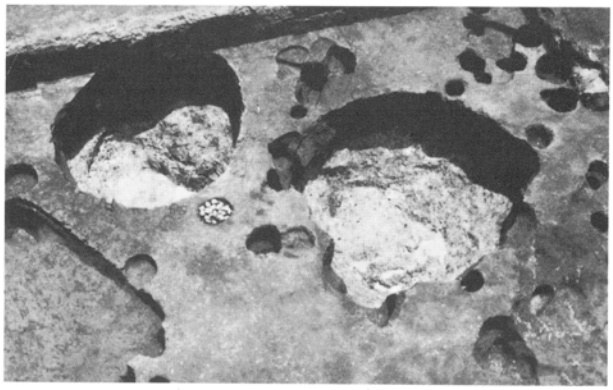

Fig. 32　SE42・SE53

覆土は、軟らかい暗灰褐色土で、鳥栖ローム塊を下位に、八女粘土塊を上位にレンズ状に挟んでいる。埋土中より遺物が出土している。弥生式土器の比率が大きいが、糸切底をもつ土師器坏・皿、輸入陶磁器の類については、他のどの遺構よりも数量的に多い。

SE 53（Fig. 34）　確認面での形状が不整の楕円形を呈し、長径は現状値で155cm、短径は 135cm、深さ 145cmを測る。平面規模が最大となる湧水部は、径200cm程の不整の円形となっている。本例もSE42と同様のえぐれ、埋土の状態を示す。検出した遺物は殆どが弥生式

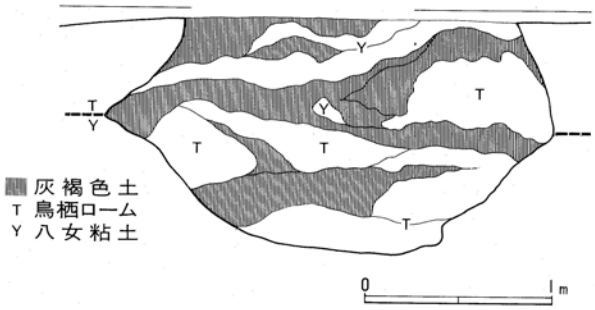

Fig. 33　SE42 土層図（1/40）

土器片で、土師器は極くわずかである。遺物の量もSE42より はるかに少ない。形状、規模、埋土等類似することからSE42に前後する時期のものとでき、中世を上限とできよう。

SE42・SE53ではともに、井戸枠等の施設らしいものは検出されなかった。また、断面図上でもそういうものは認め得ない。これと同様な井戸は、F－7d、県道部A4調査区の井戸[3]があり、古代末から中世あるいは、それ以降という年代が考えられている。

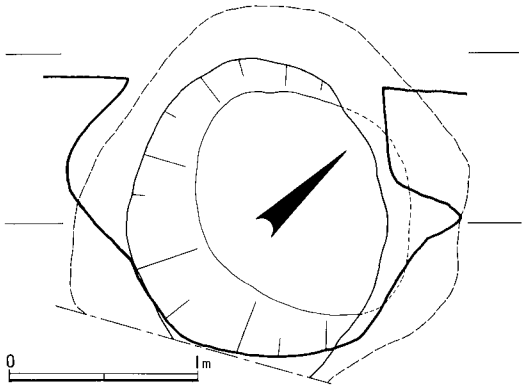

Fig. 34　SE53 実測図（1/40）

3　遺物

遺物は、量の多寡、大小を問わなければ、弥生時代以降各時代のものが出土している。全体の量としては、コンテナ4箱ほどでそのうち、弥生式土器が半分程、残りの半ば以上が、近世・近代のものとみられ、それ以外の各時代の土器・陶磁器が残りを占めるという割合である。それらのうちから、主なものを抽出し、以下に示す。

土師器（Fig.35－1～9）　坏あるいは皿とすべきものである。口径からして大形の坏（4～9）、小形の坏・皿とがある。小形のものは器高が比較的大の坏（1）と小の皿（2・3）とに分けら

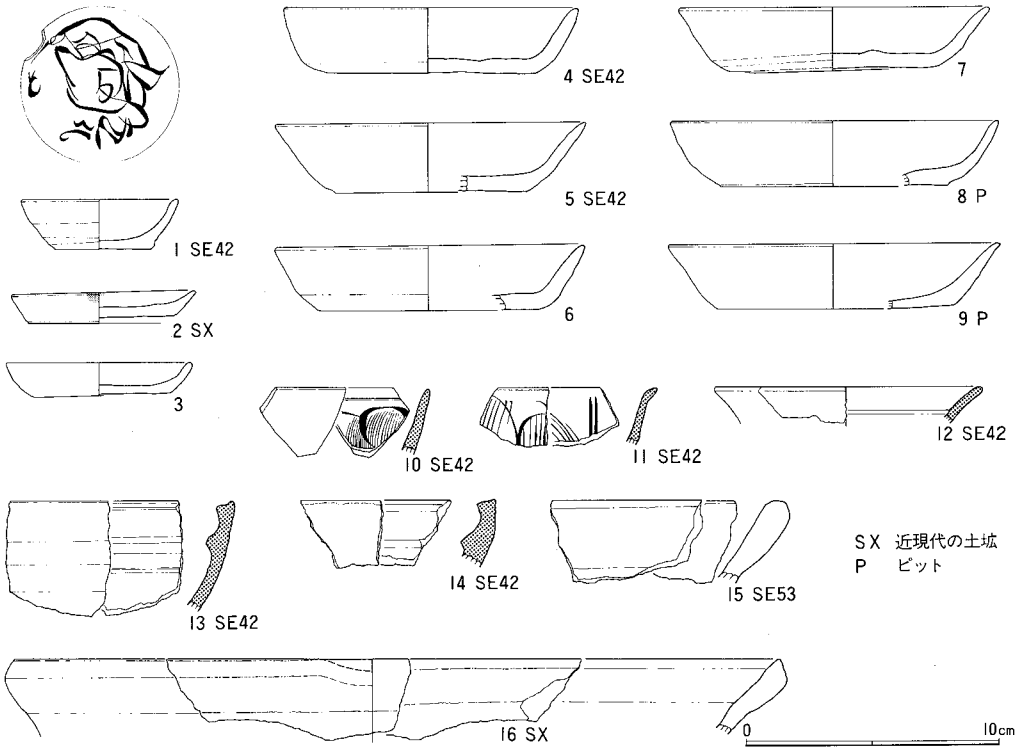

Fig. 35　土器・陶磁器 実測図Ⅰ（1/3）

れよう。いずれも糸切底で、6のみはそこに板の圧痕状のものがみられる。内外面ともに「ヨコナデ」が行われており、5と9とは更に内底部に撫調整を行っている。胎土はいずれも精良な粘土を使用しており、淡褐色から淡赤褐色を呈している。 4・5・7は内底面中心部に、凹みを補填したかのような粘土塊の貼付様のものがみられる。1は内面の全体に墨書がみられる（Fig.36)。文字か文様かは判別しかねる。2は口縁部の一部が残るのみであるが、その内外面に煤状の黒い付着物が観察できる。1は完形品で口径6.2cm、底径4.9cm、器高2.0cmを測る。2は口縁部の大部分を欠き、計測値は前と同様にして、7.2cm・5.8cm・1.3cm、3は完形で7.3cm・5.3cm・1.3cmを測る。4は完形、11.7cm・8.0cm・2.7cm。5は破片、12.2cm・8.8cm・2.7cm。6は破片、12.2cm・9.1cm・2.6cm。7は完形、12.3cm・8.4cm・2.6cm。8は破片、13.0cm・9.1cm・2.6cm。9は破片、13.1cm・9.4cm・2.6cmをそれぞれ測る。

Fig. 36　墨書土器

青磁（Fig.35－10～12） 10・11は碗の口縁部であろう。いずれも胎土は明灰色、精良、堅緻である。ともに細片である。10は直行する口縁部で、外面素文、内面の口縁寄りに1条の沈線、その下に箆描きの円弧の区画内に縦の櫛目を描いている。釉はともに灰緑色透明で、やや発泡がみられる。11は、口縁端部が外反する資料である。外面では、箆描きの弧状区画内を縦の櫛目で充填し、内面には縦の櫛目を施している。釉は褐緑色気味の透明釉で、わずかに発泡がみられる。大宰府史跡における資料についての分類中、龍泉窯系碗Ⅰ6b類に該当するものであろうか[4]。同一個体とみられる胴部破片がある。

12は皿であろう。口縁部破片であり、その復原口径は、10.7cmを測る。外反気味にのびる口縁から一段内方に屈曲することがわかる。その部分の内面に沈線が巡る。内外面ともに、他に文様はなく、胎土は灰色、堅緻である。釉は緑色透明で、発泡がみられる。

陶器（Fig.35－13・14） ともに無釉陶器ともいうべき資料であろうか。同型の捏鉢の口縁部小片である。規模は復原できなかった。体部から内湾気味に立ち上る口縁部の内面に、2条の断面三角形の突帯が付く。胎土は暗赤色で、砂粒を多く含む。

土師質・須恵質の土器（Fig.35－15・16） 15は土師質の土鍋であろう。細片のため規模は不明である。外反、肥厚する口縁部である。胎土には砂粒を含み、内外面に横方向の刷毛調整が行われている。16は須恵質の鉢口縁部である。復原口径30.2cmを測る。内外面ともに「ヨコナデ」によっている。胎土には微砂粒を含み、青灰色、堅緻である。

弥生式土器（Fig.37・38） 1はいわゆる弥生式土器ではなかろうが、包含層から出土した。胴部は球形で、それが大きくすぼまる口頸部に粘土帯の貼付による短い直立する口縁がつく。復原口径15.8cm、同胴部径27.3cmを測る。胎土には砂粒を多量に含み、細孔がみられる。内外面ともに淡灰褐色で器表の荒れが著しい。接合しないが、他にこれと同一個体とみえる胴部破片がある。朝鮮半島可楽洞出土例に形状が似る[6]。

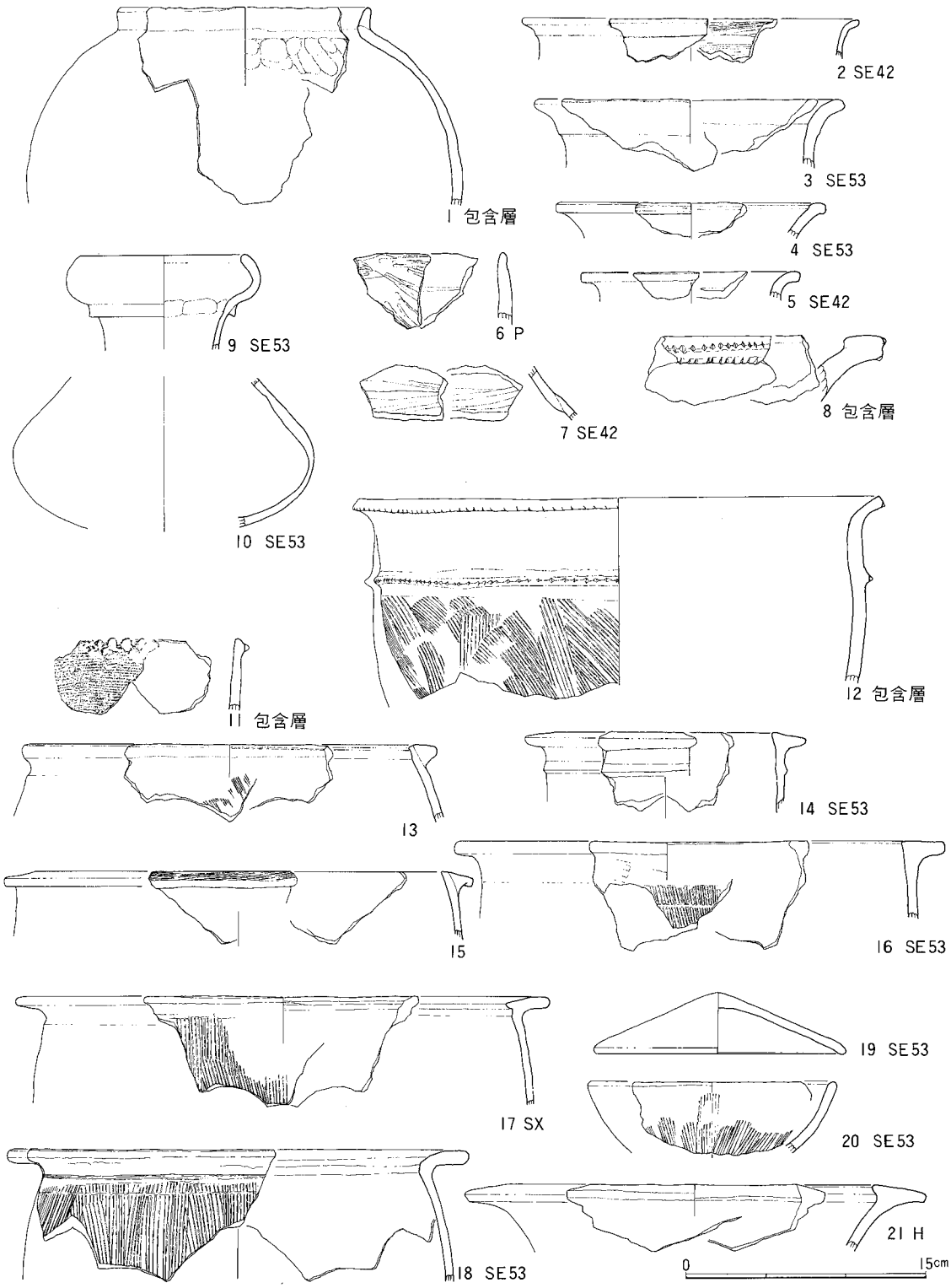

Fig. 37 土器・陶磁器 実測図II (1/4)

2～8に、壺口縁部及び胴部を示す。2・3は口縁部が肥厚、大きく外反する。肥厚部は、外面にわずかの段差をもつ。器表の状態の良い2では、外面を撫調整、内面を横方向の研磨により仕上げている。7は2の胴部であろうか、内外面とも研磨仕上げによっている。2・7は胎土が、精良、堅緻で、外面暗茶褐色で内面黒色、3は胎土に粗砂粒を含み両面黄灰色である。2の復原口径21.1cm、3は19.4cmを測る。前期前半を考えられようか。4は、口縁端上方を肥厚させ、平担面をつくり出している。口縁端部外面に刷毛調整のみられる他は、撫調整を行っている。胎土に粗砂粒を含む。5は口縁部が大きく外反する。胎土には砂粒が多い。4は復原口径16.9cm、5は同13.8cmを測る。6は口縁端部が不整な形状を呈す。粗砂粒を含む胎土で、内外面とも研磨を行っている。細片のため器形も判明でない。8は大形の土器である。大きく外反する口縁の端部上面に粘土を重ね肥厚させ、外面の上下縁に刻目を施す。同一個体とみられる底部・胴部破片があるが、接合しない。胎土には砂粒を多量に含む。器表は荒れが著しい。

11～18は甕である。11は直行する口縁端部に突帯を貼付け、刷毛調整原体による刺突を加える。突帯貼付前に横方向の刷毛調整を、外面に施している。内面は撫調整を行っている。夜臼式土器である。12は大きく外反する口縁及び口縁下の突帯に刻み目を施す。突帯以下に刷毛調整痕を残す。復原口径32.6cmを測る。13はやや内傾する口縁の端部外面に、上面が水平となる様に断面三角形の粘土を貼り付ける。胎土に粗砂を含む。赤褐色を呈し、復原口径26.0cmを測る。14～17も同様、口縁端上面をつくりだす。14は口径がやや小さく、口縁直下に突帯を付す。胎土に砂粒を含み、外面暗褐色、内面明褐色である。15は口縁端上面に刷毛調整痕を残し、外端を下方へ撫でつけた痕跡がみてとれる。胎土に粗砂粒を混じえる。内外面とも淡赤褐色を呈す。復原口径29.3cmを測る。17は口縁部が内方にも突出する。胎土に砂粒を多量に含み、内外面とも淡褐色を呈す。復原口径32.5cmを測る。以上、11以外、中期前～中頃のものと考えられよう。18は口縁部が、内面に丸味を残しながら、大きく外方に屈曲する。胎土はわずかに砂粒を含み、堅緻である。内外面ともに暗褐色を呈す。

19は蓋である。丹塗りの痕跡を残す。復原口径15.8cm、同高 3.9cmを測る。他に縁部近くに孔を有する破片がある。

20は鉢である。内外面とも丹塗りであるが、現状では生地の刷毛調整痕が現われている。復原口径15.6cmを測る。

21は高坏の坏部上半である。口縁端は内方へ突出し、その上面は外傾する。胎土には砂粒をわずかに含み、明褐色、堅緻である。

大形甕(Fig.38) 1は大きくすぼむ頸部と、そこから外方へ大きく屈曲する口縁部とから成る。口縁端上面は、外縁部以外内傾している。復原口径59.2cmを測る。口頸部直下に、低い断面三角形の突帯を付す。胎土に砂粒を含み堅緻、内外面ともに明褐色を呈す。中期後半の甕棺であろう。

2は内湾気味にひろがる口縁部をもち、それの内面と頸部外面とに断面三角形の突帯を付す。口縁部はやや丸くふくらむ。胎土に砂粒を含み、ごく淡い黄褐色を呈す。復原口径45.2cmを測

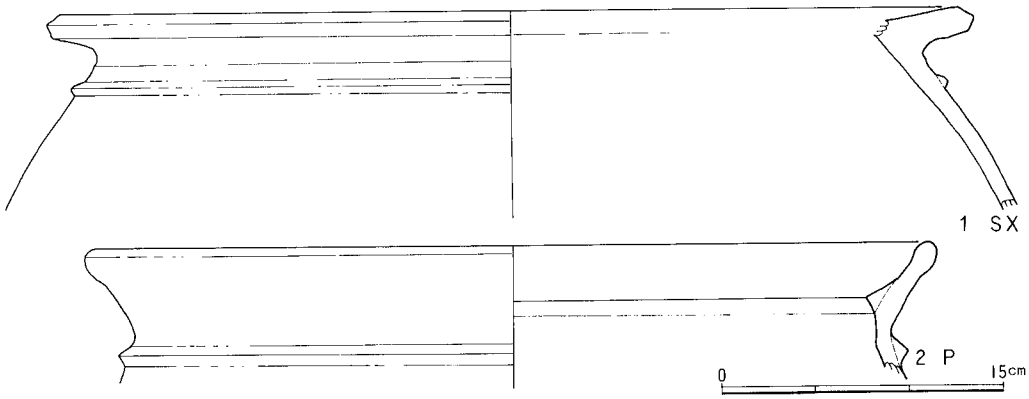

Fig. 38 土器・陶磁器 実測図Ⅲ (1/4)

る。後期前半が考えられようか。

石製品（Fig.39－1） 平面形が紡錘形の片端を欠く形状で、表裏それぞれ３面の、側縁それぞれ１面の研磨面から成る。よって断面形は細長い八角形となる。厚さ 0.3cm を測る。蛇紋岩製であろうか。

金属製品（Fig.39－2） 銅銭である。保存状態は良好で、片面に銘があり、「太平通寶」と読める。宋における初鋳、西暦 976年とされるものである。径 2.4cm を測る。土師器坏・皿細片とともにピットから出土した。

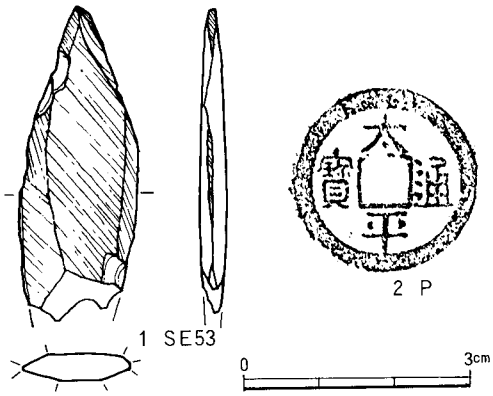

Fig. 39 石製品・金属製品 実測図 (1/1)

小結

付近の調査区と併せ考えてみると、本調査区では、近接するF－6 b、県道部調査区でみられたような、袋状竪穴を中心とする弥生時代の遺構は、検出されなかった。ところで、袋状竪穴については、西側のF－7a・F－7b の各調査区[5]及び県道部調査区のそれぞれ西半部では検出されておらず、F－6a調査区を中心として、東へは次第にまばらになりながら群集するかのようである。そこで、本調査区とF－6b調査区の間にそれの南限を考えられないだろうか。但し、本調査区又は付近では、SE42 にみるように、甕棺をも破壊、投棄するに至るような、かなり大規模な地下げが、中世を上限とする時期には行われたであろうことも、考えておくべきことではある。

（注） 1）山崎純男 編 1979 『福岡市板付遺跡調査概報（板付周辺遺跡調査報告書 5 1977～８年度）』、福岡市埋蔵文化財調査報告書第49集 福岡市教育委員会

2）沢皇臣・横山邦継 編 1977『板付―県道505号線新設改良に伴う発掘調査報告書―』同第39集

3） 1)、2）に同じ

4）森田賢次郎・森田勉 1978 「大宰府出土の輸入陶磁器について――型式分類を中心にして― 」『九州歴史資料館研究論集』 4 1～26頁

5） 1）に同じ

6）「第26図 南朝鮮地域の無文土器」横山・後藤 直 編 1975『板付周辺遺跡調査報告書(2)』福岡市埋蔵文化財調査報告書 第31集 福岡市教育委員会

Ⅳ　諸岡遺跡Ａ－２区

昭和47年以来の12次（Ａ～Ｌ区）にわたる調査によって、諸岡丘陵の北東部～南側緩斜面上には先土器時代から中世までの遺跡が存在したことが明らかとなっている。今回調査を行ったＡ－２区はＡ・Ｃ区（昭和47年・48年度調査）と那珂忠魂社の参道を挟んで南側に接する隣地で、諸岡丘陵の標高14.5～15ｍを測る南側平坦面上に立地している。当該地点は本来、丘陵尾根に近い緩斜面であったと考えられるが、現況からみて１～２ｍの削平を受けており、旧地形の形状はほとんど留めていない。

本調査は、昭和57年５月19日から５月29日まで行ったが、それに先立ち遺構の遺存状況、拡がり等を把握するために試掘調査を実施し、それに基づき調査区を設定した。調査区は東西13ｍ、南北18ｍの範囲で、専用住宅建設予定敷地の約３分の２を占める（Fig. 40 ・ 43）。

調査の結果検出された遺構は、弥生時代中期に比定される甕棺が14基である。そのうち小児棺ＳＫ04を除いた他はすべて成人棺である。遺存状況はよくなく、調査区西北部では、墓坑がわずか５cmの深さしか残っていない。ＳＫ07は、遺存状況が悪く明確でないが単棺と考えられ、残りは合口式となっている。棺の合せは、甕と甕の組合せのもの（ＳＫ01・03・04・06・08・09・10・12・13）と、甕と鉢の組合せのもの（ＳＫ02・05・11・14）とがみられる。

墓坑は、平面形が不整長楕円形のものと、隅丸長方形をなすものがある。ＳＫ03・05・10・13

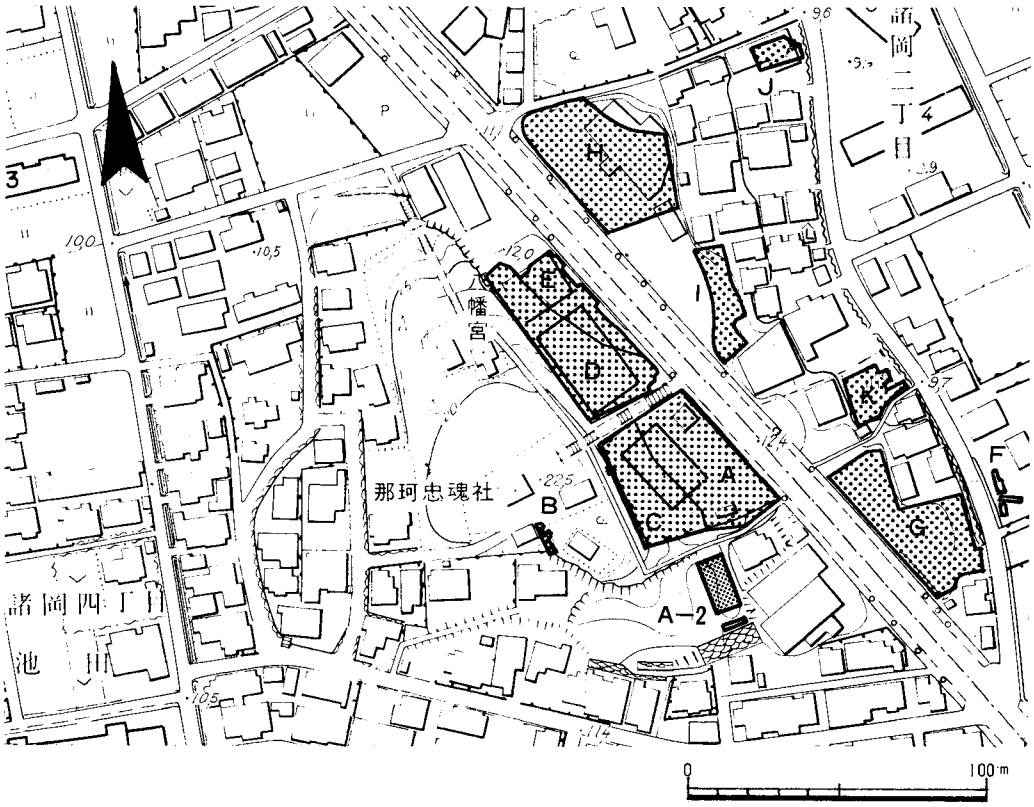

Fig. 40　諸岡遺跡Ａ－２区 位置図（1/2500）

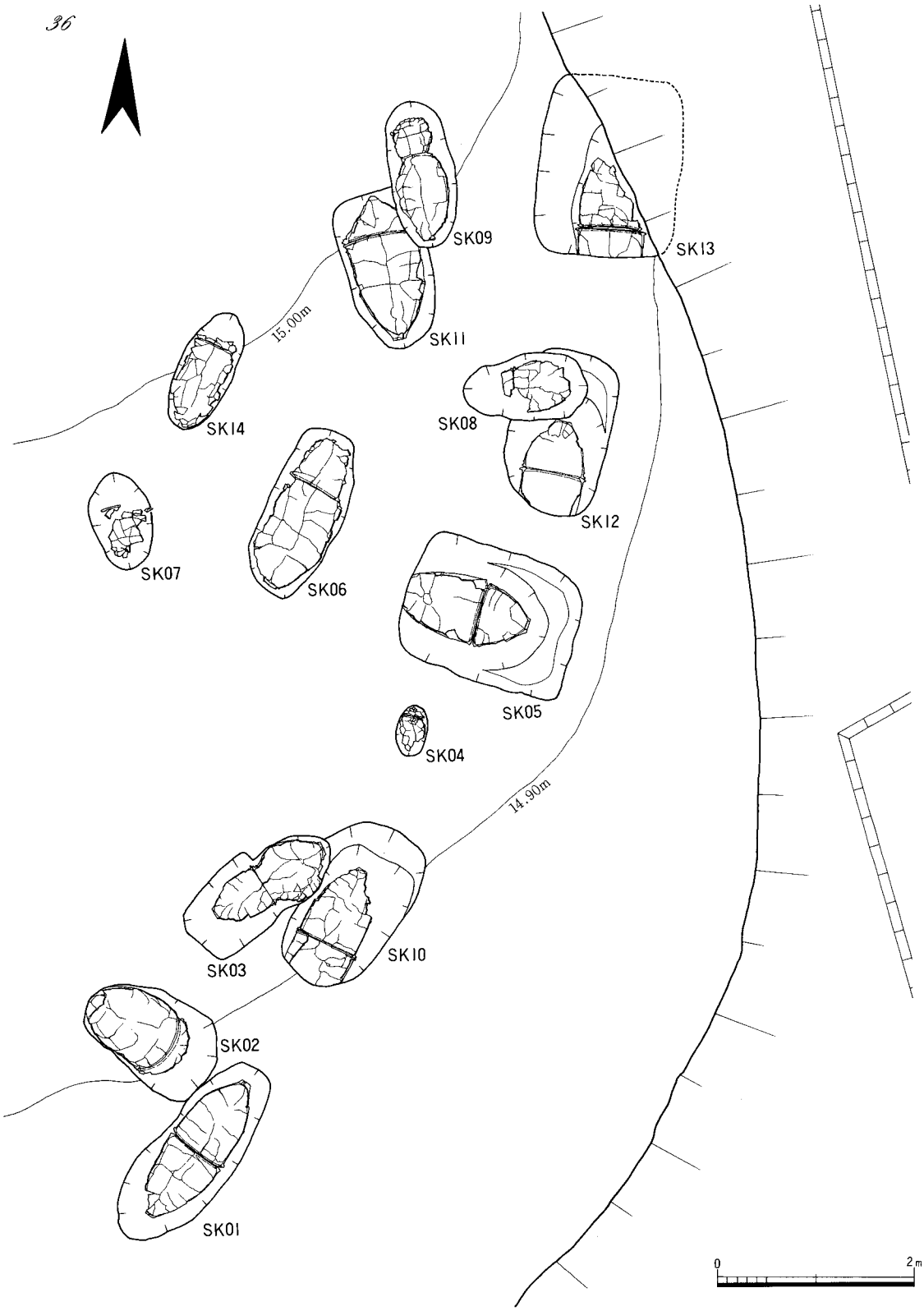

Fig. 41　諸岡遺跡A－2区 甕棺配置図（1/60）

から窺い得るのは、長方形ないし方形の竪穴を掘り下げた後、下甕がすえられる程度の大きさの横穴を掘削し、甕棺の埋設が行われた点である。

人骨の出土がみられたのは、ＳＫ01・02・09・10・11・12の６基である。ＳＫ01と12以外は風化が著しく、保存状態は悪いが、埋葬状況が一応観察できた。

頭位は、ＳＫ01が北北東を向く他は、ＳＫ02が南南東で、残るＳＫ09～12はいずれも南南西～南南東の間におさまる傾向がある。（Fig.42・44・45）

葬法はＳＫ02が伏角約30°の傾斜で甕棺を埋設し、その中へ屈脚仰臥で埋葬している他は、すべて、ほぼ水平に埋設された棺内に、屈脚仰臥で屍体を納めている。ＳＫ09は、この中にあって左側臥の可能性もあるが、埋葬後の人骨の移動等も考えに置く必要があり断定できない。今回の調査では、棺内および棺外に副葬品を認めることはできなかった。また、二次葬を窺わせるような朱、ないし丹の塗布もみられなかった。

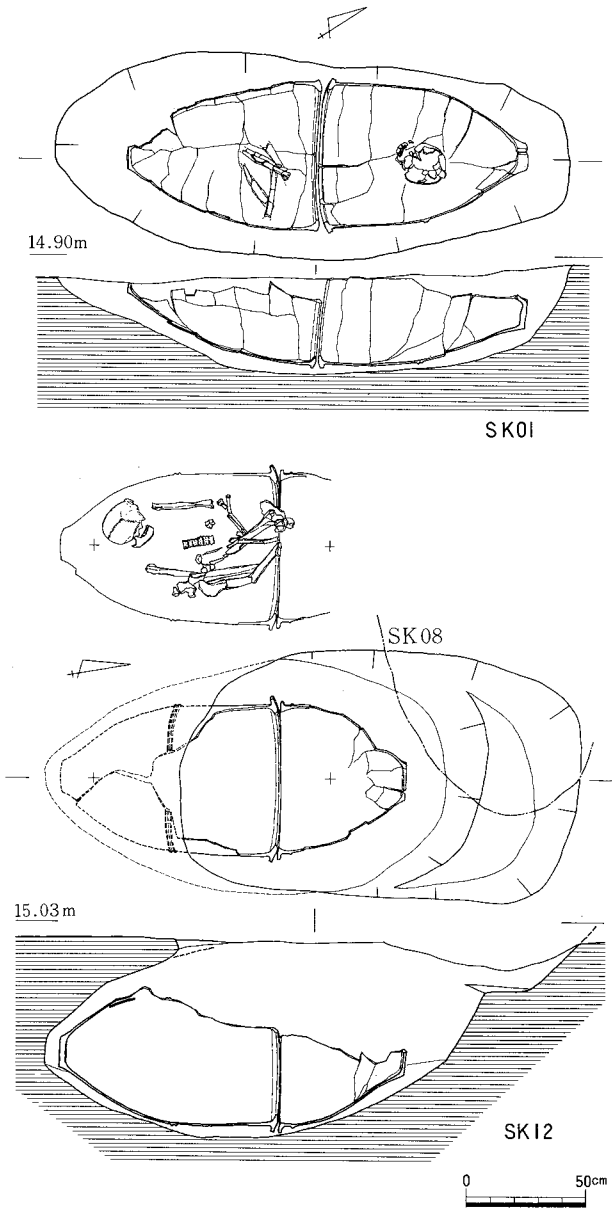

Fig. 42　ＳＫ01・12実測図（1/30）

墓坑の切り合いの先後関係を表わすとＳＫ02(先)→(後)ＳＫ01、ＳＫ10→ＳＫ03、ＳＫ11→ＳＫ09となる。また個々の甕棺の形態的特徴からみて、中期中葉を主体として、中期初頭（ＳＫ02）から、後期前半（ＳＫ04）にかかるものと思われる。

以上、調査所見について概ね述べたが、今回の調査までで、諸岡丘陵における甕棺墓の調査は、Ａ区54基、Ｂ区９基を加え77基例目である。現在までの調査成果を踏まえ、諸岡甕棺墓地についての何らかの総括を行うべきと思うが、紙面の都合もあり本報告時に行いたい。

Fig. 43　諸岡遺跡A－2区 全景（北から）

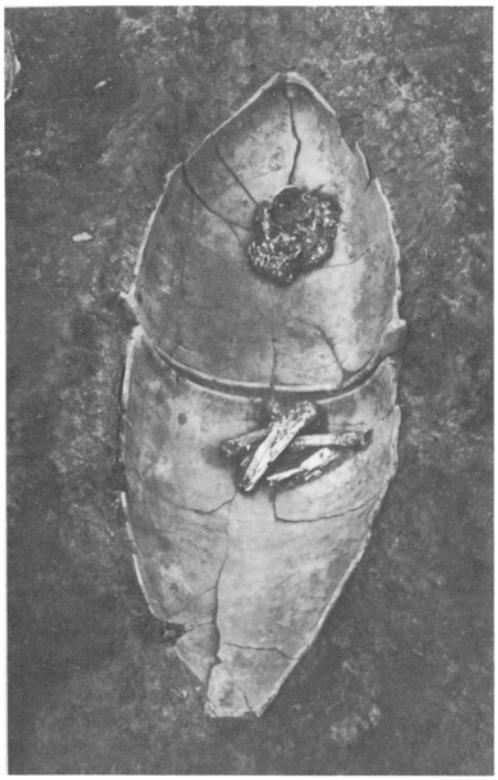

Fig. 44　SK01

Fig. 45　SK12

板付遺跡関連報告書一覧

1960　日本農耕文化の生成（図録編）　日本考古学協会

1961　〃　（本文編）　〃

1970　板付遺跡調査報告（福岡市報　8集）

1974　板付周辺遺跡調査報告書1（福岡市報　29集）

1975　〃　2（　〃　31集）

1976　板付――市営住宅建設に伴う発掘調査報告書――

（福岡市報　35集）

1976　板付周辺遺跡調査報告書3（　〃　36集）

1977　〃　4（　〃　38集）

1979　板付――県道505号線新設改良に伴う発掘調査報告書――

（福岡市報　48集）

1979　板付周辺遺跡調査報告書5（　〃　49集）

1980　〃　6（　〃　57集）

1981　〃　7（　〃　65集）

1981　板付――板付会館建設に伴う発掘調査報告書――

（福岡市報　73集）

1982　板付周辺遺跡調査報告書8（　〃　83集）

1983　〃　9（　〃　98集）

※福岡市報は福岡市埋蔵文化財調査報告書の略

福岡市埋蔵文化財調査報告書　第98集

板付周辺遺跡調査報告書(9)

1983年3月31日

発行　福岡市教育委員会

福岡市中央区天神1丁目8の1

印刷　祥文社印刷㈱